
日本台湾学会 ニュースレター

The Newsletter of the Japan Association for Taiwan Studies

第 34 号

<目次>

特集 銀幕の台湾	… 1
学会活動報告	… 18

特 集 銀幕の台湾

「この闇の中を覗いてごらん」

理事長 三澤真美恵（日本大学）

銀幕で台湾に出会ったのは香港製犯罪アクション映画『男たちの挽歌』（1986 年）が最初だったと思う。主人公の一人が兄貴分の復讐のために単身乗り込んだ先が台湾だった。西門町の入り口、中華路にかかる歩道橋からは線路が丸見えで、空気も建物も灰色にくすんでいた。

同作に限らず、1980-90 年代の香港映画では香港の都会らしさを際立たせるためのスパイスとして、台湾は香港マフィアも手を出せない仁義なき暗黒地帯として描かれることが多かった。1987 年まで戒厳令下、1991 年まで総動員体制下にあった台湾では、民主化や独立を求める反体制派が殺さ

れても真相は闇の中という事態が不思議ではなく、そうした無法ぶりは香港でもよく知られていたから、英国植民地統治下の香港人にとってすら、台湾が暗黒地帯と映ったのも無理はない。

もっとも、そんな台湾だからこそ劇中でも逃避行の終着点、再起を賭けて雌伏するためのアジールになりえたといえる。『男たちの挽歌』の監督で、いまやハリウッドの大物となったあの呉宇森（ジョン・ウー）も鳴かず飛ばずの時代に一時期台湾に逼塞したことがある。つまり、一映画ファンの視点で見れば、当時の台湾は銀幕の中でも外でも「周縁」を意味していたといえる。

その印象を 180 度転換させたのが、台湾映画『悲情城市』（1989 年）であり、『クーリンチェ少年殺人事件』（1991 年）だった。周縁だったはずの暗黒地帯は、いまやブラックホールとなって観る者を呑み込む「中心」となり、「この闇の中を覗いてごらん」と誘っていた。二作品の闇には、語られざる歴史が高密度かつ大質量で折り畳まれているように見えた。わたしが台湾映画の歴史を勉強するようになったのは、この二作品に出会ってからである。

さて、その二作のうち『クーリンチェ少年殺人事件』が 2017 年 3 月、四半世紀ぶりに 4K レストア・デジタルリマスター版で再公開された。版權の問題で DVD 化されなかった本作を古い VHS ビデオで大切に観続けていた我々にとって、初公開時を凌ぐその映像の美しさは圧倒的である（同年 11 月にはブルーレイ DVD も発売された）。繰り返し観てきたはずの、我々を魅惑するあの「闇」が、まるでこの瞬間に生まれたかのようにみずみずしく画面に溢れ、楊徳昌（エドワード・ヤン）の鬼才

はもうこの世にないという事実が胸が締め付けられる。

楊導（ヤン・ダオ、敬意と親しみをこめて、我々は彼を現場以外でもこう呼んでいた）の撮影現場を初めて訪れたのは『カップルズ』（1996 年）の時だったと思う。機材は最小限しかなく、スタッフの多くは 10 代後半から 20 代の若さという布陣に驚愕した。なかには、楊導が非常勤として教鞭をとっていた大学での教え子や『クーリンチェ少年殺人事件』に出演した少年たちもいて、幼さを残した顔で少しでも映画の力になろうと甲斐甲斐しく働く姿が印象的だった。

後に『海角七号』（2008 年）や『セデック・バレ』（2011 年）を監督することになる魏徳聖も当時 20 代でスクリプター、助監督としてこの現場にいたはずなのだが、残念なことに記憶は曖昧だ（楊導の事務所でいつもニコニコと迎えてくれた無口な青年が彼だったような気もする）。「ロケ弁」代わりに配られたのが夜店で買った金魚よろしくビニール袋に詰められた陽春麺だったことはハッキリと覚えているのだが……。

まだアツアツの麺を発泡スチロールのお椀に移してお相伴に与りながら聞いたのは、「台湾では映画は産業として成り立っていない。だから、専門の映画人なんていないも同然。製作現場では機材もスタッフも必死でかき集めて、ようやく撮影がスタートできる」という慨嘆だ。中国語もカタコトしかわからず下手な英語でやりとりしたわけだが、何もかも足りない底冷えのする夜の現場に、映画作りの熱気だけがビニール袋から出した陽春麺のように湯気をたてていた。

街を揺らす激しい選挙戦を目撃したのも、この撮影の前後だったはずだ。対立候補の支持者同士が街中で衝突するのが日常茶飯事であることに度肝を抜かれた。だが、そうした暴力すら民主的な選挙をことほぐ祝祭の一部のようにある種の眩し

さを伴って見えた。

『クーリンチェ少年殺人事件』の再公開はそんな懐かしい記憶を呼び覚ますと同時に、鮮明な映像だからこそ確認できる画面構成の妙、楊導が描いた精密な「闇の設計図」の細部をあらためて発見する機会にもなった。闇は光があって初めて描くことができる。それは、台湾が着実に民主化に向かいつつあったからこそ、戒厳令下の闇を描くこの映画が成立したという経緯と重なっているかのようでもある。銀幕の表と裏はメビウスの輪のようにつながっている。

「わたしはこの世界と同じ。誰にも変えられない」。闇のなかで立ちすくむ少女が自分を守る精一杯の身振りとして絞り出す印象的なセリフを覚えている人も多いだろう。劇中で少年たちが集うパーラー「小公園」に飾られていたのは中華民国、アメリカ、国連の旗だ。この小道具は、米ソが対立する冷戦構造のなかで、中華民国が中国を代表することを国連も承認していた「過去」を我々に再確認させる。

他方、香港の近未来を自由のないディストピアとして描いて問題となった香港映画『十年』（2015 年）では、かつての香港映画と同じく、台湾を香港人の逃げて行く先として語ってはいるが、同作中の「近未来」の台湾はもはや不気味な暗黒地帯の符牒ではない。むしろ、兩岸三地のなかでかろうじて自由が残されている希望の地というニュアンスさえ漂っている。

では、誰にも変えられないはずの「この世界」は本当に変わったのだろうか。その答えは「この世界」をどう捉えるかで異なるだろう。だが、「この闇の中を覗いてごらん」という銀幕の誘惑が、わたしの世界を変えたことは確かである。



『牯嶺街（クーリンチェ）少年殺人事件』、1991 年、楊徳昌（エドワード・ヤン）監督作品。右：張震（チャン・チェン）、左：楊靜怡（リサ・ヤン）。©1991 Kailidoscope

『花甲男孩転大人』と台南から吹く 新しい“郷土”の風

明田川聡士（横浜国立大学・非常勤）

2017年の台湾映画・ドラマでは、連続テレビドラマ『花甲男孩転大人』（全六回）が気になった。同ドラマは台湾電視と八大電視、公共電視が製作する「植劇場」シリーズの一作として、同年5月末から7月にかけて一月ほど台視で放映された。その後はYouTubeでも正式に配信され、筆者は偶然インターネット検索をしていた時にたどり着き、その面白さにぐいぐいと引き込まれてしまったのである。

テレビ放送での視聴率自体は然程高くはないようだが（平均視聴率 2.46%、最高視聴率でも 4.16%）、インターネットを通して視聴し好感を抱いた人も少なくなかったようだ。SNS で話題になっていたのも物は試しと思い観てみたらすごく素敵なドラマでした、という感想を日本で暮らす何人かの台湾人の知人や学生から異口同音に聞いたのである。

ドラマでは浪人と留年を重ね、成績不良で退学寸前の男子大学生・鄭花甲の成長物語を描き出す。花甲を好演するのは、若者に人気があるシンガーソングライターの盧広仲（クラウド・ルー）。花甲は祖母の危篤を知り、台北から台南の実家に急いで戻ろうとするが、突然のことで気が動転してしまう。そんな花甲の帰省には、サークルの後輩でボーイッシュなスタイルが似合う方瑋琪（嚴正嵐）が同行する。

台南の実家では瑞安宮という廟でタンキーをつとめる父親・光輝（蔡振南）、廟の管理委員会委員長でもある二叔・光煌（龍劭華）、ベトナムで事業を起こした三叔・光仁（康康）、元教員でスクールバスの運転手をしている四叔・光昇（柯叔元）など、親戚一同が花甲の帰宅を待ちわびている。蔡振南をはじめ、ベテラン俳優やバラエティ番組の人気MCなど台湾芸能界の著名人が何人も共演し、台南の「鄭一家」で起こるゴタゴタが演じられていくのである。

ストーリーの展開では、花甲は瑋琪との関係を同性愛でないかと父親に疑われ、三叔のベトナム人妻やその子供、さらには祖母を懸命に介護するベトナム人ヘルパーが登場するなど、LGBTや新住民、新台湾の子、外国籍労働者といった現代台湾における社会的議題のキーワードとも緩やかに結びついている。

筆者がこのドラマを六話連続（YouTubeの配信では七回に分かれている）で一気に観てしまった

のは、派手な出演キャストやドラマに映し出される現代台湾の諸相に対する関心もあったのだが、それが一番の理由ではなかった。実はドラマが原作小説の翻案であることにすぐに気がつき、原作の作者とはかつて自分が台湾留学中に同じ教室で机を並べたことを淡く思い出したからである。

原作は、楊富閔『花甲男孩』（台北・九歌出版社、2010）。簡単に原作者の経歴について紹介すると、楊は1987年に台南で生まれ、台中の有名私大・東海大学の中文系で在学中から本格的に創作を開始し、すでに数多くの文学賞を受賞している。卒業後は台湾大学台湾文学研究所に進学し、現在は同大博士候補生（Ph. D. candidate）であり、ハーヴァード大学の客員研究員として文学研究を進める若手研究者でもある。

楊の代表作である短編集『花』では、自身が生まれ育った台南を舞台にした作品が多く、台湾語や台湾華語をふんだんに取り入れた叙述が多いのも特徴的だ。ただし、楊の作風は60、70年代に活躍した郷土作家とは異なり、写実的手法で自身の郷土を取り囲む社会文化や政治経済を痛烈に批判することに主眼を置くものではなかった。

『花』では、郷土である台南の風情や伝統的習俗が、スマートフォンやパソコン（台湾では3C産品と呼ぶ。もちろん日本語での“3C”とは全く異なるので要注意）を介して台北や台中など都市で孤独に生きる現代人と繋がりあう、朗らかな郷土愛を描き出している。楊は現代台湾文学における新進気鋭の「七年級作家」（民国七十年代生まれの作家）の一人であり、「新」郷土文学の代表的作家なのである。

そんな原作者はドラマの中でもカメオ出演していて、四叔が母親、つまり花甲の祖母の死期を引き延ばそうと、あえて生前にスクールバスで「報葬」する場面で登場している。原作小説には見られない配役で、花甲の中学時代の友人という設定で出てくるのだが、楊はバスの中でとても控えめな演技を披露しているのであった。

実は「控えめな」と表現したのは訳がある。筆者が台大キャンパスで出会った楊は、全く正反対なのだ。話を始めると身振り手振りで聞き手をズルズルと引き込んでいくストーリーテラー。

いつだったか、午後の授業だったと思うのだが、楊が教室に蘿蔔絲餅を持参したことがあった。蘿蔔絲餅とは、大根の千切りを小麦粉で包んで油で揚げた台湾小吃の代表格であり、揚げたてはものすごく香ばしい。三十人ほどの学生たちは蘿蔔絲餅の強い香りに気を取られてしまい、もはや授業どころではなかった。

そんな中、周囲の視線に気がついたのか、楊は照れくさそうに頬張りながら台南・台中・台北の蘿蔔絲餅の差異について話し始めたのだが、その話し振りには講義を進める台文所の大教授でさえも引き込まれていき、クラス全員が彼の語りの虜になってしまったのである。語りの巧みさは『花』でも収録作「逼逼」をはじめ幾つかの作品で現れており、今後楊がどのような形でその特徴を活かしながら創作の幅を広げていくのか楽しみだ。

『花』の翻案であるドラマ『花甲男孩転大人』は先述のようにYouTubeで北京語字幕付きで配信され、昨年秋からはNetflixでも「お花畑から来た少年」（花甲の花はflowerの意味ではないはずだが?）という邦題で日本語字幕付きでの配信が開始されており、会員の皆様には是非お勧めしたい一作である。また、2018年春節には映画『花甲大人転男孩』（ドラマ同様のキャスティング）が正月映画として上映予定であり、こちらも今から実に楽しみだ。

そして最後に、ドラマや映画の原作である楊富閔『花甲男孩』も強くお勧めしたい一作であることを忘れずに記しておきたい。

山派か海派か —私の台湾映画体験—

山口 守（日本大学）

昨年6月撮影中の事故で惜しくも亡くなった齊柏林監督の空中撮影ドキュメンタリー『看見台湾』（2013年）を見ると、台湾が大海原に囲まれた島であると同時に、富士山よりも高い山を含む広大な山岳部を抱えていることがよく分かる。

私は信州の山の中で育ったので、生活感覚では海よりも山に親近感を覚える「山派」で、この映画でも山岳を撮影した部分に見入ってしまう。しかし、台湾映画体験から言えば、最初の頃は海を背景とする映画に強く惹かれる「海派」だった。

台湾映画における海のイメージに注目するようになったのは、黄春明の小説を映画化した『看海的日子』（監督：王童、1983年）からで、陸小芬扮する主人公の女性が、子どもを抱いて海を見つめる姿が印象に残る映画だった。養父に娼館へ売られて辛い人生を歩んできた女性が、最後にいわば自己決定権を獲得するように、一人で出産して、周囲の目や思惑など構わず、子どもと二人で生きる決意をするのだが、その凜とした姿が眩しく見え、彼女の見つめる水平線の輝きと重なる思いがした。

亀山島に見える東部海岸を列車に乗って、子どもの父親と知り合った港町南方澳へ向かう最終シーンがあまりに鮮明に記憶に残ったので、のちに実際にローカル列車に乗って南方澳まで出かけたことがある。戒厳令解除前にすでに台湾の映画人が、様々な規制をもとめず、自分自身の映像表現を実践していることを目の当たりにした思いがする作品だった。

同じ監督の『無言的山丘』（1992年）にも、女性が海を見つめる印象的なシーンがある。九份・金瓜石の金鉱で働く貧しい農家出身の兄弟と寄宿した家の寡婦が、それぞれ夢を抱きながら夢破れてもなお生きていく姿を主軸に物語が展開するが、もう一つの重要な物語として、琉球から台湾の娼館へ売られてきた若い女性とそこで働く若い男の悲恋が描かれる。帝国日本によって差別、搾取される台湾人と同じように、琉球人もまた植民地統治者日本人から差別される対象であった歴史がそこに見える。

映画の最初の方に、少女が丘の上の菜の花畑の向こうに広がる海原を見つめて故郷を想い、琉球の歌を口ずさむ場面がある。台湾人が琉球人を日本人と区別するのが、当時の時代背景なのか、監督や脚本家の意図なのか、その時には分からなか

ったが、いずれにしても、同じく帝国日本の理不尽な支配を受ける被害者同士の連帯といったわりを窺わせる悲恋を描いているように見えた。

恋人を日本人に殺され、強いられた過酷な娼婦としての生活の中で病魔に冒された女性が、その海の見える菜の花畑で、兄を失った弟を母のように抱いて交合する場面が最後にある。同情の対象となる無垢な少女の薄命という設定は、ある種のステレオタイプのジェンダーを喚起してしまうかもしれないが、ただ菜の花畑で死を迎える悲劇的な瞬間では、少なくとも彼女は自分の意志で男を抱いてやる主体性を持っているように見えた。

『悲情城市』（監督：侯孝賢、1989 年）の終わり、トニー・レオン扮する主人公の夫婦が、幼子を連れて海辺のプラットホームに立ち尽くす場面では、三人とも海に背を向けているが、これは例外的で、私の見た海派の台湾映画は『海角七号』（監督：魏徳聖、2008 年）に至るまで、登場人物たちは大抵海に目を向けている。海を見つめるという行為が、時間であれ空間であれ、彼方を凝視する台湾人の憧憬に繋がっているように思えるのが、海派の映画に惹かれる理由なのかもしれない。

一方、個人的に強く思い入れのできる、気に入った山派の映画は意外と少ない。個人的には、内部の世界を凝視する視点が欠かせないのが山派の映画の特徴だと思うので、単に山を背景にした映画ではどうしても満足できない。

『恋恋風塵』（監督：侯孝賢、1987 年）の最後で、布袋戲の名人李天禄扮する祖父が孫と山の畑に立って空を見上げる場面は、人生や恋の終わりに感じる切なさに溢れているように思えるが、物語は炭鉱町育ちの若者が台北へ出た後が主なので、山派の映画には分類しにくい。『セデック・バレ』（監督：魏徳聖、2011 年）は全編を通じて山の物語だが、山派の映画と呼べないのは別の個人的理由からだ。原住民族の文化や伝統に圧倒される思いがあると同時に、霧社事件のような歴史事実とどう向き合うか回答を迫られているような気がして、物語の舞台となる山を見つめる余裕がなくなるせいかもしれない。

ただ、同じ原住民族が主人公の映画でも、『夢幻部落』（監督：鄭文堂、2005 年）は個人の物語なので、主人公の男の生活空間と内向きの精神に目が向く意味で山派の映画と呼びたい。

工事現場で怪我をして、いまは山の部落に暮らす失意のタイヤル族の男性のところに、「あなたの財布がコンクリートの中から見つかりました」と奇妙な通知が届く。かつて町の工事現場で落とした財布が解体過程で見つかったという知らせを受けて、主人公は山から下りて町へ向かう。そのバ

ス移動の場面に日本の流行歌が流れるのだが、それがもう一つの物語へと想像を誘う。日本料理店に勤める男が、間違い電話の向こうで語られる女性の恋の物語に引き込まれていく二番目の物語がそこから始まる。

フィクションとメタフィクションが同時進行する斬新な映像表現で、主人公が暮らす山と都会の対比（同時に人間関係の対比でもある）が印象的な山派の映画である。音楽担当の不浪・尤干が2005年に不慮の事故で亡くなったので、いっそう印象に残っている。日本で一般公開されていないのが誠に残念である。

山派か海派という区分け以外に、個人的には都会派か田舎派か、或いは昼派か夜派かなど、考えたら止まらないお茶のみ話風の映画談義もあるのだが、それは別の機会にとっておくことにする。

「梅花」と私

岡野翔太〔葉翔太〕（大阪大学大学院）

映画に関する原稿依頼があったとき、正直、戸惑った。「名探偵コナン」や「クレヨンしんちゃん」の映画であれば、ほぼ毎年欠かさず見ているが、そのほかの映画はあまり見たことがない。そのため、映画に関する知識もほとんどない。

どのような切り口であれば、強引にでも映画と結びつけられるかを考えた際、脳裏に浮かんだ映画は、1976年に公開された台湾映画『梅花』だけであった。そこで、ここでは映画そのものよりも、映画の挿入歌やそれが波及したエピソードを中心に述べていきたい。

私事で大変恐縮だが、筆者は1990年に神戸で生まれた、在日台湾人二世（いわゆる日台ハーフ）である。私の父は台南生まれ台南育ちで、1979年に留学生として来日した。

小・中学校と、家から近いこともあり、私は神戸にある中華人民共和国系の華僑学校に通っていた（私の入学をめぐり度々夫婦喧嘩があった）。同校は「五星紅旗」を掲揚し、運動会など学校行事では当然のように中国の国歌「義勇軍進行曲」が演奏されている。そのため、私は今でも、「起來！不願做奴隸的人們！」の旋律には親近感があると同時に、歌詞は脳内に刷り込まれているため、一字一句綺麗に歌いとおすことができる。

ただ、幼いながらこの「国歌」には違和感があった。同校の運動会でははじめに、国旗掲揚と国歌演奏があるのだが、この時間、父は一切現れたことがない。それは、父がその学校の教育方針にひどく反発していたからで、家でも「祖国は台湾だ、なにが中国だ。中国の国歌が流れ終わってから運動会に行く」と言っていたためである。

子どもは親の影響を受けやすいもので、父の話を「そうなんだ！」と思い聞いていた。学校の歴史の授業で「中華民国は1949年に滅亡した」と板書きされば、自分はノートに「中華民国は台湾に移り現在に至る」と勝手に書き換えて提出し、よく先生に怒鳴られていた。今でも、中華民国の「青天白日滿地紅旗」を見ると、なんとも言えない不思議な愛着が沸く。それは、幼少期に培われた学校対自分の「祖国」攻防戦によって形成されてしまったものといえる。

そうした事情もあり、私は幼いころ、日本と中華民国の「国歌」を知らずに育ってきた。小学校低学年のときに、中国の「国家」と「国花」に関する授業があり、常々「台湾の国歌と国花はなん

だ」と気になっては、父に国歌を歌って貰っていた。

私は父の影響を受けやすく、父がカラオケでよくテレサ・テン（鄧麗君）を歌っていたこともあり、小学5年生にして、僕もテレサの曲を聴くようになっていた。小学6年生から中学3年生にかけて、お小遣いを貰ってはテレサのCDや書籍を買い集め、テレサが歌う日本語・北京語・広東語・台湾語の曲はほとんどすべて歌えるようになってしまった。そのなかで出会ったのが「梅花」（作詞・作曲劉家昌）という曲である。

それを初めて聞いたのは、いわゆる「厨二病」真っ最中の中学2年のときである。以降、私は自分が使っていた、簡体字で溢れる同校の地理や歴史の教科書のなかに、「梅花」の歌詞と「青天白日滿地紅旗」の落書きを随所に書き込み、ささやかな「反発」をしていた（台湾の特定の政党の支持層が聞いたら喜びそうだが、私は政治的に「中立」である旨を重ねて表明しておく）。

今、改めて考えると噴飯ものだが、「梅花」の詞のなかには「冰雪風雨它都不怕、它是我的國花」という一節があったため、私はこの中華人民共和国系の学校で自分に吹き荒れる「冰雪風雨」に耐え忍ぶ「我（自分）」＝「梅花（中華民国の国花）」と考え、この曲に感情移入していたのである。

前置きがとても長くなったが、この「梅花」という歌は、映画『梅花』の挿入歌（映画ではテレサ・テンのバージョンは使用されていない）である。この映画は、抗日戦争期における台湾の「抗日」劇を題材とした映画である。ただ、日本統治下にも関わらず台湾人が北京語を話していたり、さらには当時ありもしなかった「梅花」の歌を歌う場面があるなどフィクションも多く、映画制作当時の台湾の時代背景が随所にうかがえる作品となっている。

林初梅が指摘しているように、同作は1970年代の台湾における日本記憶の「喪失」の象徴といえるべき作品で、当時台湾ではテレビでも幾度と放送され、同作による「洗脳」を受けた者も多くいたという（林初梅〈「日本」記憶的流轉——《梅花》、《稻草人》、《多桑》與《海角七號》反映的時代軌跡〉、《海翁台語文教學季刊》第8期、2010年）。

この映画が公開された当時、私の父はちょうど兵役に就いており、訓練中には「梅花」などの愛国歌曲を歌わされていたという。1950-70年代に台湾で生まれた者にとって、この歌は、青春時代によく聞かれ、歌った歌かもしれない。

中華民国の台湾化と本土化が進んだ昨今の台湾において、この歌は台湾では特定の政党の集会以外で歌われることはなくなった。かくいう私も台

湾でこの歌を耳にした記憶がない。しかし、日本ではよく耳にする。

私は台湾系の華僑総会に青年部員として所属しているが、縁あって横浜中華街の双十国慶節パレードを手伝った時のことである。ふと、「梅花」のメロディーが聞こえてきた。聞くとところによると、有志で参加している日本の私立学校の吹奏楽団が、この歌を奏でながら、一緒に街中を行進してくれているという。

さらにまた縁あって、2015年11月、当時の国民党代理主席である黄敏恵が横浜に来た際の宴会に出席することがあった。宴もたけなわに差し掛かったとき、「梅花」、「中華民国頌」、「国家」などの愛国歌曲が流れ、参加していた華僑たちの大合唱が始まったのである。

参加していた華僑のなかに東京中華学校や横浜中華学院など台湾系の華僑学校を卒業した者も多かった。聞けば、映画の『梅花』は知らなくても、歌の「梅花」は華僑学校で教わっていたといい、華僑団体が開催する双十節の場でも、「梅花」はよく歌われている。そうした華僑のなかには、中華民国国籍を所持する大陸ルーツの者が多く存在し、とくに横浜の「台湾系」華僑組織には、広東ルールの者が多くを占めている。彼らにとって、台湾は直接的な故郷ではなくても、中華民国が「祖国」であることに変わりはない。

確認したところ、1981年には「梅花」はすでに、横浜の台湾系華僑団体主催の双十節行事で歌われていた。歌の流入のきっかけには、為政者側の思惑が働いていたかも知れないが、日本と中華民国の国交が途絶えた中、彼らのアイデンティティを支える上で、この歌が持った喚起力は無視できないものである。

大学に入るまで、私は中華民国と台湾の区別も気にしたことなどなかった。「梅花」の過去も知らず、ただ単に台湾の歌として「梅花」を受容してきた。幼い頃に聞いていたため、今でも「梅花」を聞き、カラオケではお構いなしにこの歌を歌うのだが、たまに「土生土長」な台湾の友人とカラオケに行ったらこの歌を歌うと、「国民党員しか歌わないよ」と冗談半分に罵られることがある。

自分のことを「台湾人だ」と思いながらも「梅花」が好きというのは、なんて説明すれば良いだろうか。台湾の友人とのカラオケの場における私はまさに、「冰雪風雨」に耐える「梅花」である。

2017年度の台湾映画

赤松美和子（大妻女子大学）

私は、2017年4月から一年間、勤務先の国外研修制度を利用して、台湾大学台湾文学研究所に訪問学者として所属させていただいた。2017年度一年間に台湾で公開され、日本公開を熱望する超絶推薦台湾映画を公開順に四本紹介したい。

『阿莉芙（アリフ、ザ・プリン（セ）ス）』は、『父の初七日』の王育麟監督が撮ったLGBTや異性愛の三組のカップルをめぐる物語だ。

一組目は、パイワン族の頭目の息子に生まれるが、性転換を望み、台北でヘアスタイリストとして働くゲイの阿莉芙と、ルームメイトでレズビアンで李佩貞。ちなみに阿莉芙の父親で、パイワン族の頭目を演じているのは、原住民民謡の父・胡徳夫（キンボ）。二組目は、バイセクシャル或いは女装趣味の異性愛者の公務員と、異性愛者のピアノ教師の夫妻。三組目は、阿莉芙たちが通うバーのママだが、膵臓癌が見つかり、余命幾何もないゲイのSherryと、Sherryと姉弟のように助け合いながらも、余命宣告後はSherryの愛に気付き受け入れる電気技師。

三世代三組のストーリーはどれも見逃せないが、一番の注目は、やはり自己実現と頭目の継承問題とに悩み続ける阿莉芙だ。ある夜、ガールフレンドと別れた李佩貞は、阿莉芙の体を求め、子どもを身籠る。『GF*BF』然り、LGBTの物語でも、次世代の誕生により家の継承が暗示される結末は、台湾的ハッピーエンドの形なのか。果たして頭目の継承と阿莉芙の人生は如何に。

続いて、黄信堯監督による台湾語映画『大佛普拉斯（大仏+）』。

仏像製作工場「文創藝術」の夜間警備員である菜埔は、友人と門の脇の警備員室で、冷えたお弁当を食べながらテレビやポルノ雑誌を眺め、ささやかな楽しみを見出していた。二人は、ある日、社長のベントに搭載されたドライブレコーダーのデータを発見。そこには、若い女の子と社長との会話や、愛人の喘ぎ声のBGM付きで走行映像が、延々と録画されていた。見続けていくと、仏像製作工場の製作中の仏像の前で、社長が愛人を投打する様子までも記録されていたのだった。

だが、菜埔に社長を告発する勇氣はなかった。しばらく後、完成した仏像はある巨大宗教団体に納品され、お披露目のイベントが開催される。読経中、会場の中央に祀られた仏像の中から、「ドーン、ドーン」という謎の音が聞こえ、人々は震撼

する。果たして、その音の主は、社長の愛人なのか愛人の幽霊なのか、それとも…。

そもそも、私たちが信じ仰ぎ祈る仏像の中身は、何なのか。『大佛普拉斯』には、格差社会の底辺を生きる人々と、金と権力を持った人々との、両方が描かれている。貧しい人たちの世界はモノクロで、ドライブレコーダーの映像を含めお金持ちの世界はカラーで撮られているのも特徴的だ。ちなみに映画の大半は白黒だった。

大仏の次は観音！『GF*BF』が今も鮮烈な印象を残す、楊雅喆監督の『血観音』は、おどろおどろしいまでの極彩色で撮られた、金と権力とセックスの欲にまみれる、毒母娘三人の物語。

舞台は 90 年代前後、国民党將軍の未亡人である棠余月影は、表向きは骨董商だが、裏では政商を動かす黒幕的存在で、二人の娘（一人は実は孫娘）はその毒母に、「我是為妳好」の言葉で操られている。母は、金と権力のためには娘の命さえも惜しまない。30 億円の土地を巡っての殺人事件、馬英九と王金平を彷彿とさせる、中央と地方の政治家たちの抗争、湯英伸案のようにお金持ちの家で使用人として働く原住民の青年が、その家の娘を殺害するなど…。

戦後台湾政治史の暗闇が女性たちの視点から語られるのも興味深い。活弁士のように時折現れる人間国宝・楊秀卿のテンポよい月琴に合わせた歌語りも絶妙だ。作中には、中国語、台湾語、広東語、上海語、日本語など、戦後の多言語状態も表されている。『血観音』は、2017 年の第 54 回金馬奨で、最優秀作品賞を受賞した。

最後に紹介したいのが、宋欣穎監督による台湾アニメ映画『幸福路上(オン・ハピネス・ロード)』。

蒋介石が亡くなった 1975 年に生まれた、アラフォー台湾人女性の主人公・林淑琪（声：桂綸鎂）は、台中で生まれ育ち台北に進学し、現在はアメリカ人の配偶者とアメリカ在住。そんな時、祖母の葬儀のために一時帰国した台湾で、幸せが何かわからなくなり、自分の半生を振り返る。

小学校では台湾語を話して教師に怒られ、親の勧めで塾に通い、北一女に合格後は、医学部進学を期待する親に背き、民主化運動をしていた従兄（声：魏德聖）に憧れ、台湾大学の人文系に進学、大学時代はデモに参加し、卒業後はマスコミに勤務、激務に消耗していたころ、なんとなく自分の夢がアメリカ行きであることに思い至り、従兄の紹介で渡米、結婚し、妊娠したものの、夫から離婚を切り出される…。

世間の価値観に振り回される他の人たちとは異なり、アミ族の祖母はいつも彼女の心に向き合ってくれていた。彼女は祖母を通して自分に向き合

い、自分の生き方をようやく自分で選び進み出そうとする。映画に何度も現れる「台湾あるある」を楽しみながら、台湾朋友たちの顔を何度も思い出した。

以上、四本に共通しているのは、いずれも濃厚に台湾性と多元化を描き込みつつ、新しい表現方法に挑戦していることだ。

LGBT を原住民の頭目継承問題に掛け合わせた『阿莉芙』、台湾の格差社会を白黒とカラーでユーモラスに描き出した『大佛普拉斯』、台湾戦後史を女性の視点から毒毒しく描き出し、鑑賞後に毒を吐かずにはいられない『血観音』、「台湾あるある」をほのぼのと描きほろりとさせる大人のアニメ『幸福路上』。どの作品も現在の台湾社会と台湾戦後史への理解 2017 年版アップデートとしてもぴったりの作品たちである。

楊徳昌「牯嶺街少年殺人事件」の 風景に寄せて

宮畑加奈子（広島経済大学）

えもいわれぬ懐かしさが込み上げた。映画のストーリーにではない。眼前のスクリーンに映し出された数多くの建築物に、である。そしてその懐かしい思いが最高潮に達したのは、長年お世話になった台湾大学法学院（現在は台湾大学本校敷地内に移転している）の名称がエンドロールに流れたその時であった。

2017年5月の連休中に、これまでも台湾映画を多く扱ってきた広島市の横川シネマで、楊徳昌（エドワード・ヤン）監督の「牯嶺街少年殺人事件」（1991）をようやく見る事ができた。台北市の重慶南路に住んでいたときから、その牯嶺街（主要な舞台の一つである建国中学も！）がほど近い場所にあることに気がついてはいたものの、日々の生活に追われる中、まだ見ぬ映画の舞台はいつしか頭の片隅に追いやられてしまっていた。

1960年代初頭の実話にインスピレーションを得たとされる本作では、建国中学夜間部に通う外省人家庭の男子高校生「小四」の悲劇的恋愛譚、そしてその家族の物語が綴られる。ただ映画への渴望とは裏腹に、上映開始後ほどなく、劇中で小四の母がふと漏らした、「日本人と8年戦って、日本家屋に（住み）日本の歌（を聞き）・・・」という台詞に、日本家屋に対する思いの一端を垣間見たことがきっかけとなり、物語の舞台装置として重要な役割を担っている建築物へと私の関心は移っていった。

件の台詞には台湾の日常に溢れてやまない日本的なものの名残りを揶揄する気持ちが言外に示されており、（映画という架空の物語を通じて）台湾社会の複雑な思いの一端が照射されているように思えたからである。そしてまた、折につけ舞台装置として現れる、建国中学や旧台湾大学法学院の昔日のたたずまいに、自分自身の思い出や記憶が縋り交ぜとなり、あたかも劇中劇のような不思議な感覚さえ覚え始めていた。

私が初めて台湾を訪れた1989年3月は、未だ戒厳令下にあつて、映画と同様の無形の閉塞感と社会の変革期に内在する膨大な熱量が混在する時代であつたように思う。当時は、古い日本家屋が今以上に多く残存しており、最初に台北駅に降り立ったとき、あたかもひと昔前の日本にタイムスリップしたかのように感じたことを覚えている。そのような錯覚を起こさせた要因は、紛れもなく古びた日本家屋の存在であつたが、今にして思えば、

この時の不思議な違和感と安堵感が、数年後に実現する台湾留学へとつながったような気がしてならない。

留学時の学び舎となった徐州路の旧台湾大学法学院は、日本統治期に台湾総督府高等商業学校（後に台北高等商業学校に改称）として建てられた建築物であり、在学中の1998年に台北市定古蹟に指定されている。台湾大学での講義のほとんどをこの歴史ある校舎で受けられたことはこの上なく光栄なことであり、この場を通じて得られた数々の出会いは生涯の寶でもある。時空を超えて共通の学び舎をもつというご縁により、緑水会という台北高商卒業生の同窓会に毎回（月1回の開催）参加させていただいたことも懐かしく思い出される。

当初住んでいた延壽街、続く重慶南路を経て、最後に住んだMRT西門駅近くの長沙街は、台北市の繁栄の痕跡を色濃く留める地区であつた。長沙街からほど近い中華路の周辺には、西本願寺跡を覆いつくすように違法建築が立ち並び、休日の朝には界限で有名な饅頭屋まで、よく饅頭を買いに出かけたものである。後にそれらの違法建築は一掃され、饅頭を買うことはできなくなったが、現在は西本願寺広場として復元され、周辺のランドマークとなっている。バラックの林立する情景を知る者にとっては隔世の感がある。

90年代後半の台湾、特に陳水扁市長時代の台北市では、有形文化財の活用が提唱されるようになったが、旧台湾大学法学院の向かい側の市長官邸（日本統治期の台北州知事官舎）が改修され、市民の憩いの場として生まれ変わったときのとまどいを、今も鮮明に記憶している。ちなみに1997年には、中華民国憲法増修条文の第4次改正により「多元文化」の文言が盛り込まれ、この時期に特徴的な文化概念の拡張は、以降の植民地期の建築物に対する認識にも大きく影響を及ぼすこととなった。

（これもまた小説という架空の物語ではあるものの）リービ英雄『模範郷』には、米軍高官の家族が暮らす戦後台湾の日本家屋を舞台として物語が進行するが、昨今の「日式建築」ブームの根柢には、様々な時代、人、思いを付帯させながらも住み継がれることでかろうじて命脈を保つことができた建築物の屈強な幸運さがある。

こうして振り返ると、私が台湾に滞在した期間は、非常法制の瓦解した90年代初頭から、民進党政権の二期目にわたる、台湾の激動期と重なっており、それはまた台湾の文化概念の転換期にも連動する。

牽強付会を承知でさらにいえば、冒頭に感じた懐かしさは、私個人の郷里の記憶ともつながって

いる。1930年代に建てられた尋常小学校跡地にある熊本の実家には、台湾で目にした建築物と同年代の家屋が現存しているのである。

様々な思いが脳裏を交錯する中で、自分自身の記憶もまた歴史の一部として存在していることを強く感じた、3時間56分の上映時間であった。そしてクライマックスのシーン、夜の闇を背景に浮かびあがった、「この社会と同じ、何も変わらないのよ」という台詞とともに、「小四」によって命を絶たれた悲劇のヒロイン「小明」の表情に、急速に変わりゆく台湾の息吹を身をもって感じていたはずの楊徳昌監督の思いを重ね合わせたことも付け加えておこう。

『KANO』、藤井先生、 そして時々高雄集合

謝 惠貞（台湾・文藻外語大学）

日本留学から台湾に引き揚げた最初の赴任校は、打狗（高雄）にある。蒸し暑さと忙しさに追われ、時に Deng 熱にも怯えつつ、頑張る日々を送っている。

最初の年、久々に帰省した時、家族と誘いあって、『KANO～1931 海の向こうの甲子園』（馬志翔監督、2014 年。以下『KANO』と略す）を観た。日本統治期に、嘉義農林学校（通称「嘉農」＝かのう）の先生、近藤兵太郎が、原住民、漢人、日本人の学生による混成チームを育て、甲子園で準優勝する物語だった。実話だということ自体にも非常に惹かれた。

実際観てみたら、球技の訓練もリアリティがあるが、それよりも、永瀬正敏が演じる近藤先生のマインドトレーニングがとても印象的だった。学生に「甲子園」を毎日唱えながらランニングさせ、夢を身近に感じさせる。また、いざ未知の土地、甲子園に踏み入れたら、黒土を珍しがる学生にむかっては、自分のシャツに土を塗って、「土は土だ」と言って平常心を保たせる。さらに、試合の前に、鷹の行動を想像させながら、試合進行のテンポ作りを教える。「一球入魂」しているのは、選手だけでなく、監督先生もそれ以上の「魂」を注いでいるなあ、としみじみ思った。

映画鑑賞後のある日、かつて通訳を頼まれた作家、李昂氏（『迷いの園』、『夫殺し』の作者）から、電報のような簡潔なメールを頂いた。「藤井省三先生を嘉義に招待するが、一緒に来ない？」という李氏の誘いに応じて、私もつい映画『KANO』の舞台嘉義に飛び込むことになった。

指導教官の藤井先生と映画愛好家のご友人たちとのご一行は、見学の初日は嘉義大学の校史室で、甲子園の表彰盾や写真を見学した。私は勤務の関係で、初日は見送って残念な思いをしたが、翌日「嘉義市立野球場」と、台湾総督府設立の「林業試験場嘉義支場」だった「嘉義植物園」の見学に合流することができた。

野球場には、記念モニュメント自体がバットになっていて、すぐ見つけたが、次に訪ねる「嘉義植物園」は、熱帯樹木や植物が多数栽培されていて、まるで迷宮のようだった。方向音痴の私は、未知の土地ではいつも迷いやすいので、先生や李昂氏たちにぴったりついて園に入りこんだ。李昂氏はこの年、嘉義の駐市作家だったので、嘉義の名所にお詳しいようで、その紹介によれば、台湾

最初の南洋杉の母体がここにあり、台湾全土に広がった南洋杉はすべてその子だそうだと。それを思うと、今の台湾にあるたくさんの木がこの園から繁殖したことに、しばし想像を馳せた。

この日の打ち上げは、嘉義の創作料理屋で行われた。昼間、植物園で出会った、薫り高いお花、蝴蝶薑（こちょうしょう、バタフライジンジャー。中国語名「野薑花」）がまた料理に登場した。台湾南部ではその香りを活かし、粽や料理にする地域もあるとは知っていたが、口にしたのは初めてだった。充実した一日の見学に同行させてもらったお礼に、黄靈芝編著の『台湾俳句歳時記』に収録されている「蝴蝶薑」という季語を使って、一句を詠み上げ、藤井先生への感謝メールに添えた。

朝晩に 蝴蝶薑おく かの（KANO）迷い園

先生に献句するのは、留学生時代の名残りだ。おそらく学生に経済負担をかけないお考えで、藤井先生は、学生からお土産などをもらうことを断っている。そのため、先生に、お礼や祝い事をする時、費用のかからない俳句を贈っている。

また、この「嘉義集合」で知り合った映画愛好家たちも、2016 年と 2017 年、藤井先生を迎えた文藻の講演会に合わせて、わざわざ「高雄集合」してくださった。中には、私よりも高雄に詳しい方がいて、逆に侯孝賢の旧家を案内してもらったこともある。

思えば、方向音痴の私にとって、人生とは迷いの園そのものだ。しかし、縁のある方々とは、何度も時空間を変えて、再会している。その度、いつもよい水先案内人に恵まれ、ありがたい思いをするばかりだった。

文学研究をしているせいか、映画鑑賞をする時でも、無意識にそのモチーフや物語の構造を捉えようとする癖がはたらく。その構造がそのまま、

自分の人生と重なっていることに気付く度に、いろんな教訓を得ることができた。

『KANO』は、思えば人生の水先案内人を描く映画でもある。このような視角から観ることができたのは、2017 年第 3 回日台作家会議（東京大学文学部中国文学研究室・台湾 Trend Micro 教育財団共催）に学者として招聘され、『KANO』を二回目に観た時のことだった。

「子を育てて知る親の恩」という諺のように、自分が教壇に立ってから、先生の苦心を思い知らされ、また時には申し訳なさや感謝が一斉に込み上げてくる。人生という園の水先案内人である藤井先生に感謝を込めつつ。



著者撮影：嘉義の「檜意森活村」にある近藤先生の家

「再見瓦城」 —台湾が登場しない台湾映画—

富田哲（淡江大学）

以前にミャンマー出身の学生を教えたことがある。記憶に残っているかぎりでは3人、いずれも華人で、うち1人は「僑生」（華僑学生）としてミャンマーから来ていた学生、もう2人は小学生のころに台湾にやってきたということだった。

前者のように「僑生」であれば、出身地もふくめてその旨の通知が学期開始前に大学からあるのだが、後者2人のような学生は、一般の台湾人学生と学籍上何ら変わるところはなく、とくに親しく話す機会もなければミャンマー出身だということには気づけなかっただろう。ビルマ語を専攻する日本の大学生が、日本語教育の実習で淡江大学に来たことがあるが、上記2人のうちの1人がその実習生と、ビルマ語で楽しそうに話す姿が強く印象に残っている。

ミャンマーから台湾への移民は何も最近始まったことではない。新北市中和の緬甸街（ミャンマー街）は、古くからミャンマー出身者が居住する場所として知られており、今日では毎年4月ごろ、水かけ祭りが、多文化理解を促進するためのさまざまなイベントとともに市主催で開催されていたりもする。

「再見瓦城」（「マンダレーへの道」）の監督の趙徳胤は、1998年、16歳の時にミャンマーから台湾へやってきた華人であるが、この作品は、タイへの密入国をはかるミャンマー華人の蓮青（呉可熙）を乗せたボートが川をくだってくる場面から始まる。

後に恋人となる阿国（柯震東）らとともに向かった先はバンコク。バンコクで仕事を見つけるが、労働ビザのない蓮青はほどなく摘発されてしまう。その後、阿国の紹介により、彼がはたらく化学繊維工場での職を得るが、劣悪な環境での勤務を強いられる。蓮青はよりよい条件での就労を求めて、労働ビザの取得をこころみるものの、だまされ続けてそれはかなわない。結局はタイの山地の先住民族のふりをして身分証を取得することになるが、それに必要な金を用立てるために売春をしたことに阿国が激怒し、両人は悲劇的な結末をむかえる。趙徳胤へのインタビュー記事によれば（*1）、彼の周囲で実際に起こったいくつかのできごとがストーリーに反映されているという。

労働ビザの取得にやっきになる蓮青に、阿国が理由をたずねる場面がある（阿国も労働ビザを持っていないが、取得にそれほど積極的ではない）。

労働ビザがあれば好条件の仕事につけるし、タイのパスポートを申請することもできる、タイのパスポートを手に入れたあかつきには、台湾へ行くことができるという蓮青に、阿国は、台湾に行ったとしてもしょせん「打工」（アルバイト）しかできないのだから、ここにいても同じだろうと言うのだが、作品中、この場面以外に台湾が登場することはない。

しかし、この作品が台湾社会と無関係なわけではもちろんない。というのも、台湾行きを種々の方法でなしとげた多くの人々が観客の周囲におり、またかれら自身も観客だからである。そしてその背後には、何倍もの、蓮青のように台湾行きをかなえられなかった人々がいる。

趙徳胤は上記記事で、かつて貧困から抜け出すべく来台をこころざし、それを実現した自分は、きわめて幸運な部類に属しているとふりかえっている。さらにつけくわえれば、今日、ミャンマーは台湾企業のビジネスの舞台としても注目を集めている。また、タイでミャンマー華人を雇用している台湾企業も少なくないであろう。

ちなみに、筆者は本稿執筆にあたり、淡江大学の図書館でDVDを借り、あらためて鑑賞したが、折しも「東南アジア／南アジア映像音楽展」なる企画が開かれているさなかで、「再見瓦城」もその展示作品の一つになっていた。政府の新南向政策に呼応したものであることは想像にかたくない。

ところで、この作品では雲南語、ビルマ語、タイ語が飛びかう。たとえば蓮青と阿国の会話など、ミャンマー華人のあいだで使われているのは雲南語（趙徳胤によれば「ミャンマーの雲南語」（*2））だが、台湾の観客にとっては、聞いただけでは意味がわからないセリフが多いだろう。映画館のなかの観客の大多数は、つねに字幕を読むという作業を要求されていたのではないだろうか。

もしこの推測が正しいとすれば、思い出すのが「賽德克・巴萊」（「セデック・バレー」）である。この作品も映画館で見たが、同じ空間で鑑賞していた観客のほとんどは、冒頭の一部分をのぞけば、セデック語や日本語で展開するストーリーを、字幕に頼って追っていたはずである。

「賽德克・巴萊」にせよ「再見瓦城」にせよ、セリフの大半は観客がみずからの言語とは認識しない言語、そして理解できない言語で発せられている。しかしその理解不能性は、これらが台湾映画であることを何らさまたげるものではない。

台湾が登場しない台湾映画、聴者の観客も字幕を読まなければ理解できない台湾映画。台湾社会の歴史的あるいは社会的な重層性、多様性を背景

とし、そして当然のことながらマーケットを十二分に意識しつつ創作されるこうした作品は(*3)、われわれに何を語りかけているのだろうか。

「再見瓦城」について言えば、「東南亜」(東南アジア)を舞台に、台湾人監督がメガホンをとったというにはとどまらない意義を持っているように思う。観客にとって蓮青や阿国は単なる「外国人」ではなかろう。台湾の人気俳優が演じていること、エスニック的、言語的な側面から多少の近縁性が感じられることはもとより、通時的にも共時的にも、みずからと蓮青、阿国を接続するための文脈が台湾には存在する。

もちろんそれは、多文化主義の称賛、あるいは経済的搾取に対する批判といった形で単純に解釈されるべきものではない。豊かさ、暖かさ、冷たさ、悲惨さなどが複雑にからみ合う、台湾社会の一人一人の日常につながるところに、「再見瓦城」は横たわっているのである。

*1 「我只是試著去理解身邊的真實故事」『THE BIG ISSUE TAIWAN』2016年11月、50-53頁。

*2 第17回東京フィルムメックスでの趙德胤へのインタビュー(2016年11月21日)。

<http://cinema.u-cs.jp/movie-info/road-mandalay/>。

*3 浦川留「マンダレーへの道」、川瀬健一編『台湾映画 2017年』東洋思想研究所、2017年、43-45頁。

空手チョップ、美麗島を行く —力道山は映画スターでプロレスラー—

山崎直也(帝京大学)

世に「昭和の巖流島」と呼ばれる1954年12月22日の日本プロレス選手権を、「木村の前に木村なく、木村の後に木村なし」と言われた不世出の柔道家・木村政彦の側から描いた増田俊也『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』(新潮社、2011年)のヒットにより、再び注目を集めることとなった昭和の英雄・力道山。

2017年には、レガシー部門で世界最大のプロレス団体WWEのHall of Fame(プロレスの殿堂)入りも果たした「日本プロレス界の父」は、大相撲の力士時代から大型バイクのインディアンを駆って国技館に現れる稀代の傾奇者であり、自ら鬚を切って相撲界と訣別、プロレスに転じた後も、その活動は一介のプロレスラーの枠に収まることはなく、様々な事業に手を伸ばし続けた。

そのような時代の寵児を放っておかなかったのが当時の日本映画界であり、『日本映画データベース』で力道山を検索すると、29の作品がヒットする。その多くは、プロレスの記録フィルムと思しきものだが、1953年の『薔薇と拳銃』(新生プロ、志村敏夫監督、鶴田浩二主演)を皮切りに劇映画への出演もあり、主演作も少なくない。

ここまで、「銀幕の台湾」という特集テーマと無関係に話が進んでいるかに見えるが、1951年9月16日以降の『聯合報』の記事を収録する『聯合知識庫』で力道山を検索して行き当たる最も古い記事は、プロレスラーの力道山ではなく、映画スターの力道山を紹介するもの、即ち、力道山主演映画の封切りを知らせる記事なのである。

「民族画家展出巨画 国楽社英敦睦邦交」(1956年11月30日付)という記事は、題名からは力道山とも映画とも無関係に見えるが、文中に以下の記述がある。

日本の東宝は、台湾語映画の勃興後、日本映画の興行収入が大きな影響を受け、既に数本のカラー映画が十万元あまりの損益を出している惨状を鑑みて、太平洋兩岸のプロレス王者・力道山主演の『龍虎闘』を台湾市場に向けて大いに売り出す。本作の艶やかなカラー画面は緊張感に溢れ、『忠(ママ)本武蔵』に勝るとも劣らぬものであり、日本映画の劣勢を挽回するものと期待されている。〔引用者注——黄仁(2008)『日本電影在台湾』(台北市:秀威資訊科技)によれば、1956年の上半期には、稲垣浩監督、三

船敏郎主演の『宮本武蔵』(東宝)が続編も含め、台湾で立て続けに公開されている。]

この短い記述から 1950 年代半ばの台湾で台湾語映画が日本映画を凌ぐ人気を博していたこと、カラーの長編映画が未だ新鮮味を保っていたことなどが見て取れるが、力道山が本職のプロレスではなく、銀幕のスターというもう一つの顔で台湾の紙面(ここではあくまで『聯合報』一紙を見た過ぎないが)に初登場を果たしたという事実は、意外性があって面白い。

同年 12 月 2 日には、「龍虎闘」と題する記事が掲載され、映画の見どころを紹介しているが、その内容から、この映画が 1956 年の力道山主演映画『男の魂』(協同プロ、内川清一郎監督)であったことがわかる。鳴り物入りで台湾に上陸した同作が台湾市場における「日本映画の劣勢を挽回する」起爆剤となったか、あるいはあだ花として無残に散ったか、台湾映画史上における同作の評価は本職の映画史家の手に委ねるが、同作の公開が翌年 11 月の力道山率いる日本プロレスの台湾遠征の呼び水となったことは間違いない。なお、前述の黄仁の著作によれば、1957 年 4 月には『力道山、鉄腕の勝利』(日活)が『力道山環遊世界』、同年 6 月には『力道山空手チョップの嵐 東京大会』(日活)が『神拳力道山』のタイトルで台湾に上陸を果たしている。

力道山研究家の仲兼久忠昭氏によって 2017 年 11 月に出版された全 784 頁の大著『力道山史 否! 1938-1963』(自費出版)は、貴重な資料を多数収録した力道山研究の金字塔だが、同書の記録によれば、1952 年以来年間試合数が 100 を超え、夏に魔人ボボ・ブラジルと血みどろの死闘を展開、10 月に待望の初来日となる鉄人ルー・テーズと世界選手権を争った 1957 年は、力道山のプロレス人生において最も輝かしい 1 年であったかもしれない。

その充実の 1 年を締めくくりに行われたのが台湾遠征だが、力道山の自伝的著作『空手チョップ世界を行く』(原書は 1962 年出版、2012 年に日本図書センター「人間の記録」シリーズの 1 冊として再版)にわずかな記述があるものの、数多くの力道山本もこれに言及するものは少ない。

力道山一行は、1957 年 11 月 24 日に飛行機で台湾に上陸。前述の仲兼久の著作には、11 月 25 日の台北の試合(対戦相手、勝敗不明)と、同月 29 日のタッグマッチ(パートナーは元横綱の東富士、対戦相手はビル・サベージ&ハロルド坂田、勝敗不明)が記録されているが、11 月 28 日付『聯合報』の記事では、前日(27 日)夜に台北の三軍球

場で初戦が開催、全 5 試合のメインイベントに登場した力道山は、東富士と組んでビル・サベージ&ハロルド坂田とタッグマッチを戦ったと記されている。

同記事はまた、同日(28 日)の興業でも力道山はメインに登場、ビル・サベージと 30 分一本勝負のシングルマッチを戦うとしており、29 日付の記事でその試合が報じられている。さらに 12 月 2 日付の記事に同日の三軍球場での試合が全 6 戦の最終日とあることから、力道山一行は、台湾で少なくとも 6 回の興行を行ったと考えられる。

当初、銀幕のスターとして台湾のメディアに紹介された力道山が本職のプロレスで、生身の人間として行った台湾遠征は、「鋼人」の異名をとる 70 歳の老拳法家が力道山に挑戦を表明したり、「黒牛」と称される台東の拳法家が日本プロレスの阿部修と異種格闘技戦を戦ったりと、短いながらも波乱に満ちたものであったことが当時の『聯合報』の記事からうかがわれる。だが、詳細な試合結果を含め、その全貌を知るには、さらなる資料の発掘が必要であろう。

筆が走るに任せて、与えられたテーマから完全に逸脱してしまった。最後に強引に映画の話題に引き戻すが、1957 年の「台湾プロレス事始め」で力道山に並ぶ歓迎を受けたのが、当地台湾出身の羅生門綱五郎、2メートルを超える長身の持ち主で、師匠の力道山同様、元力士(四股名は新高山一郎)、映画俳優としての活動歴がある。黒澤明の『用心棒』で新田の丑寅側の用心棒として、三船演じる桑畑三十郎を散々に痛めつけるのが、羅生門綱五郎その人である。

台湾遠征でまさに故郷に錦を飾った羅生門だが、好事魔多し、帰国後ほどなくして日本プロレスを解雇されてしまう。類まれなる巨躯をもって日台のはざまを、時代の転換点に生きた新高山一郎／羅生門綱五郎の物語もまた、台湾研究者の関心に訴えること請け合いだが、残念ながら与えられた紙幅は既に尽きた。稿を改めて、いずれまたお目にかけたい。

「稻草人」

沼崎一郎（東北大学）

私が初めて見た台湾映画は「稻草人」である。1987年、公開直後に見た。大学院生だった私は、前年の秋から台北で博士論文調査を始めており、ようやく台北の暮らしに慣れた頃だった。戒厳令が解除される前だったか後だったかは覚えていない。蔣経国総統も存命で、少しずつ政局は動き出していたとはいえ、翌年に始まる激動の予兆は未だ感じられなかった。

日本統治期が描かれた映画という宣伝に誘われて、映画館に足を運んだ。いわゆる郷土文学は既に一定の地歩を得ていたし、本土化論争もホットであったが、台湾史や台湾社会研究はまだまだマイナーだった時代である。一般公開の映画が、正面切って植民地時代の農村を取り上げるというのは、画期的だった。

「稻草人」とは案山子（かかし）のことだ。ストーリーは、貧しい農民の兄弟が、村に落ちた不発弾を見つけ、町の駐在所に届ければ褒美がもらえるのではないかと話になって、おっかなびっくり天秤棒に爆弾を吊るして町まで出かけていくが、褒美がもらえるどころか怒られて爆弾を海に捨てろと言われ、泣く泣く海に投げ込むと爆発、しかしおかげで魚が爆死し、偶然の大漁となり、帰りは爆弾の代わりにたくさんの魚を天秤棒にぶら下げて、意気揚々と帰郷するという単純なものだ。「愚かな農民」たちと、同じように「愚かな日本人警官」が、不発弾をめぐって右往左往する様子がコミカルに描かれている。

しかし、中国語も習いたてであり、閩南語のできなかった私は、観衆と一緒に笑うことはできなかった。登場する日本人や、彼らの話す日本語も、なんとも不自然に見えた。特別おもしろい映画だとは、思えなかった。

それでも、毎日テレビで見ていた地上波の抗日戦争ドラマなんかには比べれば、ずっとリアリティがあるなあと思ったものだ。地上波3局しかテレビがなく、その全てが国民党の統制下にあったので、夜の連続ドラマは、しばしば抗日戦争ものだった。そこに登場する日本兵や日本人が、なんとも珍妙だったのだ。私のような戦後世代が見ても日本兵がそんなダラダラ歩くわけではないだろうと思わずにはいられないほどフラフラユラユラ兵隊が行進するシーンがあったり、高級士官の夫人の和服姿がだらしく崩れたマダムバタフライみただったり、およそありえない描写ばかりなのである。

だから、「稻草人」に出てきた日本の兵隊や警官は、少々不自然ではあったが、テレビで目にするものよりはマシで、まだ私の知る戦前に近いものが感じられ、こんな映画が台湾で上映できるようになったのだなあ感慨を覚えた。しかし、そこに何か深い意味を読み取るとか、「日本人」である自分について振り返るといったことは、当時はなかった。

映画に疎い私は、王童監督がどういう人かも知らなかったし、台湾ニューシネマへの関心もなかったからかもしれない。しかし、それ以上に、一年暮らしているうちに、身の回りに氾濫する「日本語」に慣れ切っていたからではないかと思う。

たとえば近所の写真屋のおじさんは、初めて訪れた私がたどたどしい中国語で「照相機」と言うと、「え？ ああ、カメラね」と日本語で答えて私を驚かせた。近所の薬屋のおじさんは、私が「ワンチンヨウ」と言ったら、「え？ まんきんゆ？」と聞き返してくるのだった。

彼らの話す日本語は、声調がついていたり、閩南語の表現が日本語読みで入っていたりした。三音節の単語、たとえばカメラや背広は、中音→高音→低音になることが多い。また、よく耳にしたのは「趣味がある／ない」という言い方だ。「興味がある／ない」という意味で、閩南語の「有／無趣味」が日本語読みされているのだ。

近所の歯医者さんは女医さんだったが、戦前に東京の歯科医学専門学校を卒業していて、それはもう上品な日本語を話す人だった。総じて、旧制中学校や専門学校、女学校出身者の話す日本語は、「本物の日本語」に聞こえた。それも、私にとっては耳慣れた日本語であって、外国人の日本語では全くなかったのだ。

私の隣りの家に住んでいた主婦も女学校を出ていて、流暢などと言ったら失礼なほど自然な日本語を話す人だった。端午節のときには「チマキ作りましたから、どうぞ」と届けてくれたが、あまりに自然な日本語のせいか、うっかり日本風のチマキを想像してしまい、一口かじって台湾チマキの味と臭いに驚くといった具合であった。日中、隣りから軍艦マーチの合唱が聞こえてきて驚いたこともある。後で聞くと、女学校時代の友人が集まってカラオケをしていたそうで、「女学校時代は軍歌ばかりだったから」とのことだった。

そういう日本語世代の存在に、最初こそ驚いたけれど、次第に「あたりまえ」に感じるようになっていたのではないかと、30年後の今にして思う。そして、あたりまえになってしまうと、そういう彼らの存在が見事に公的な空間から掻き消されて

いる状況に、言いようのない切なさを感じるようになっていた。当時は、あるはずのモノ、いるはずのヒトが、公的なメディアからは消えていた時代だったから、「稻草人」が、不十分ながらも日本統治時代にあったモノ、日本統治時代にいたヒトを描いているということに、不自然さを感じながらも、感心したのだろうと思う。

もちろん、「稻草人」の主題は日本ではない。ある時代の台湾の農村である。王童監督は、1989年には「香蕉天堂」、1992年には「無言的山丘」を制作しているが、既に帰国していた私は公開時には見ていない。「稻草人」と合わせて「台湾近代三部作」と呼ばれている。台湾政治が急速に動き出した時代に、「外省人」の監督が描いた台湾近代とはどのようなものだったのか、改めて見てみたい気がする。魏徳聖三部作と、比べてみようかな。

ウソから出たマコト ——外省人一家の悲喜劇・「香蕉天堂」——

松田康博（東京大学）

^{バナナ・パラダイス}
「香蕉天堂」…これは台湾の外省人一家をめぐる「ウソから出たマコト」の物語である。

共産党との内戦に敗れ、「バナナが腹一杯食べられる」「天国」のような台湾に撤退することになった2人の山東人軍属。主人公の門栓は、無学で頼りない弱虫で、体格のよい兄貴分の得勝といつも行動を共にしていた。

2人は、一緒に台湾に撤退した後、軍の慰問劇団で飯炊きや裏方として働き、糊口をしのいでいた。ところが得勝は、冗談混じりに「共産党とは縁が深い」と口走ったことで、共産党の嫌疑を掛けられてしまい、拷問を受け、脱走するはめになる。1人になった門栓にも追っ手が迫り、逃げ惑う中、夫を病気で失い、赤子を抱えて途方に暮れるヒロイン、月香と出会う。

門栓は、ここで月香の亡夫・李麒麟になりすまし、仕事を転々と換えて流浪するはめになった。その途中で再会した得勝は、拷問の後遺症と望郷の念に苦しみ、ついには発狂してしまう。一方、学歴や身分の詐称に成功した門栓は、公務員になって役所に紛れ込む。そして、夫婦関係もなく、血もつながらない「家族」を養うため、習ったこともない英語を使って奮闘する。

時は流れ、台湾は1980年代を迎えた。門栓と月香の「一人息子」、李耀華も成長し、家庭を持った。中台関係が緩和し、中国大陆への里帰り訪問が解禁されたことで、耀華は、門栓がなりすました人物の父親（つまり自分の祖父）を探し出した。そして耀華は、なんと香港で祖父とこっそり対面を果たし、今から門栓に電話をかけてくるというのである。

さて、困った。門栓は自分がなりすました人物の父親と話をしなければならなくなったのだ。門栓は月香に尋ねる。「李麒麟の家の状況を教えてくれ。さもないと話が噛み合わない」。ところが、月香は動揺して何もしゃべらない。ついに月香の秘密が明かされる…。

この映画は、戦乱を乗り越えて台湾に渡った「外省人のあるあるネタ」が満載の作品である。偽装結婚、なりすまし、学歴詐称、公文書偽造、血のつながらない家族…多くの外省人が、生きるため、ウソで人生を塗り固めてきた。これらのウソが、愛情と同情をもって、そしてちょっと突き放されながら、淡々と描写されていく。

描かれる台湾社会は美しく、素朴で、苛烈である。下駄履きを纏足の代わりに演ずる劇団員、間の抜けた「ナカシ（流し）」、職場に潜むスパイ、美しい北京語の尋問、大陸反攻を叫ぶ軍隊、腐敗した警察、鬼気迫る迷信的祭祀、バナナ農家で働く逃亡外省人、望郷のあまり発狂する若者、過保護で過干渉な外省人家庭、能力もないのに威張り散らす公務員…。スクリーンには、既視感溢れる映像が次々と流れ、台湾人達の笑いと涙を誘う。

「国語」が下手な本省人と「台湾語」が下手な外省人。でもお互いに何とか距離を縮めて一緒に生きようとしている。バナナおばさん（香蕉嫂）は、発狂した得勝を抱きかかえ、その母を演じる。そして門栓もまた、自分がなりすました李麒麟の父親との会話にのめり込んでいく…。

「香蕉天堂」^{バナナ・パラダイス}とは、台湾海峡をまたぐ戦争と政治に人生を振り回された人々が、泣き笑いしながら生き抜き、ウソの家族関係をマコトの家族愛に転換していった人間ドラマなのである。

「こんなふうにして、一生が過ぎるなんて、思ってもみなかったわね（我没想到我們就這樣過了一輩子）」

月香の一言は、外省人第一世代のみならず、激動の時代を生き抜いた台湾人達に共通する慨嘆なのではないだろうか。

筆者は、単著『台湾における一党独裁体制の成立』（慶應義塾大学出版会、2006年）で、蒋介石をはじめとする中国国民党の統治集団が、大陸での失敗を総括し、一党独裁体制を再建し、台湾で再出発を果たしたプロセスを分析した。この映画は、論文では決して書くことができなかった、台湾における外省人社会の実像を見事に描き切っている。筆者の論文なんかより、百倍面白くて分かり易い。

なぜこの映画をこれほどまで微に入り細に穿って観たのかというと、実は、1991年に日本の映画祭で初公開された際、この映画の日本語字幕作りに関わったからである。1985年9月から翌年2月まで淡江大学に留学した際、映画館やKTVでしょっちゅう観たのは、ほとんどが娯楽性の高い香港映画かハリウッド映画であった。大体が（結婚前の妻との）デートだったので、シリアスな作品はあまり観なかった。「国片」と呼ばれた台湾映画は、その後日本で行われた映画祭などで観たものがほとんどである。

お堅い政治史関係の文献ばかり読んでいた自分としては、妻との共同作業となった字幕作りは、戦後台湾の社会史をなめるように読み解く作業であった。台詞の一言一句、俳優の一挙一動、大地の一木一草に到るまで、「これはどういう意味なの

か？」と問いながら、妻とともに解答を探しながら、繰り返し観た。純粋に楽しい作業だった。映画館で観たときは自分の作品のようにいとおしく思えた。

26年後の2017年、「香蕉天堂」^{バナナ・パラダイス}は大阪で再度公開されることとなり、私達はふたたび、字幕の調整を依頼された。少し違う版だったからである。四半世紀前の誤訳をつぶしつつ、ずっと鮮明な映像で映画を堪能した。大学院生だったとき字幕翻訳した映画を、大学教員になってからもう一度見直すことができたのだ。普段は思い出すこともないのに、ほとんどの台詞が頭のどこかにへばりついていていた。

このとき、ちょうど私は「台湾における中国国民党の社会調査——外来の独裁政権は現地社会をどう解釈したのか？」（笹川裕史編『戦時秩序に巢喰う「声」——日中戦争・国共内戦・朝鮮戦争と中国社会』創土社、2017年）という論文を書くため、1950年代の社会調査資料を大量に読んでいた。

当時非公開だった国民党の社会資料には、まさに「香蕉天堂」^{バナナ・パラダイス}が描き出す社会の諸相がそのまま書かれていた。この映画はフィクションであり、真実そのものではないが、まさに真実を反映した外省人たちの集団的記憶だったのである。よい映画を二度も「熟読」することができて、私は幸運だった。資料も映画も、時間をおいて繰り返し咀嚼すべきなのだ。

「香蕉天堂」^{バナナ・パラダイス}は、王童（ワン・トン）監督が1989年に製作した作品で、「無言の丘」、「村と爆弾」と併せ、いわゆる「台湾三部作」の一つに数えられている。ほぼ同時期に公開された「悲情城市」は、本省人の悲劇としての二・二八事件を扱った作品であったが、「香蕉天堂」は、外省人の悲劇を扱った作品である。多重移民社会である台湾を肌で感じるためにも、「悲情城市」と併せて観てもらいたい作品である。

日本台湾学会活動報告

定例研究会 歴史・政治・経済部会

担当理事：小笠原欣幸（東京外国語大学）

第119回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所、早稲田大学東アジアの政治と思想研究部会

日時：2017年10月6日（金）18:20～20:20

場所：早稲田大学3号館306号室

司会：浅野豊美（早稲田大学）

報告：鶴園裕基（早稲田大学）

題目：シリーズ「若手研究者」

送還、登録、法的地位—占領初期在日中国・台湾人に対する移動管理の始動

参加人数：24名

活動報告：

「若手研究者シリーズ」として早稲田大学政治経済学術院助手の鶴園裕基氏が報告した。本報告は、GHQ占領初期における在日中国・台湾出身者に対する送還、身分登録、そして法的地位の確定という三つの側面から、当時日本にいた人々が直面した移動と居住をめぐる諸条件がどのように形成されていったのかを考察したものである。報告者の鶴園氏は、米国、日本、中華民国の外交文書を使用し、送還状況、GHQ・日本政府・中華民国政府の三方の見解と交渉結果を明らかにした。

結論をまとめると、次のようになる。①戦争を背景として渡日し、さらに治安維持上の障害とみなされた人々が概ね送還され、戦前から日本に居住し、合法的な生計を営む人々が「華僑」と認められた。②GHQ・日本政府・中華民国政府は、在日台湾人の国籍に対して見解が一致しなかったが、国籍の認定如何にもかかわらず、彼らは、日本国内において外国人として区分され、彼らの国際移動と居住が関係国の共同管理のもとに置かれた結果として、「華僑」という身分が生まれた。

（記録者：魏逸瑩）

第120回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所、科研基盤B（代表：若林正文）

日時：2017年11月18日（土）13:00～18:00

会場：早稲田大学3号館404室

司会：佐藤幸人（アジア経済研究所）

報告：小笠原欣幸（東京外国語大学）

若林正文（早稲田大学）

岸川毅（上智大学）

家永真幸（東京医科歯科大学）

田上智宜（大阪大学）

松田康博（東京大学）

松本充豊（京都女子大学）

題目：台湾政党政治の始動

—オポジションと党国体制

コメンテーター：薛化元（政治大学）、林泉忠（中央研究院）

参加人数：62名

活動報告：

2017年11月18日、早稲田大学台湾研究所・日本台湾学会共催で「台湾政党政治の始動—オポジションと党国体制」と題するシンポジウムが開催された。科研基盤研究（B）（代表：若林正文）の2期6年にわたる台湾政党政治形成過程の研究結果が科研メンバーによって報告された。

まず、小笠原欣幸（東京外国語大学）は「若林科研6年間の活動報告」と題する報告を行った。科研第1期「台湾政治における反対党の誕生—国際体制・孤立国家・市民社会とナショナリズム」において党国体制におけるオポジションの形成過程、および第2期「台湾政治体制移行期の民主進歩党—『改革型』民主化とナショナリズムの相克」において、民主化の過程の中で民進党が果たした役割と制約に焦点を当てた。そして資料収集（文献、インタビュー）およびその内容、分析作業とその結果、研究アプローチの強化などの具体的手法について説明した。

若林正文（早稲田大学）は「オポジションから入る—戒厳令下台湾政治研究こと始め」と題して、元々台湾歴史研究を志した報告者がどのように激動する台湾現代政治研究へと移っていったかを報告した。若林は1982、3年ごろの林洋港内政部長の「3%の戒厳令」発言など台湾政治の激動に触れ、人的交流から各地の選挙観察、康寧祥落選、「自決」をめぐる問題などを実際に見てきた経験をふまえ、歴史研究から現代政治にシフトしたのは確かに泥縄式であるが、しかし自在にシフトしていく効用を語った。

岸川毅（上智大学）は「『行政院立法局』から『台湾の立法院』へ」と題して、民主化の中で制度を「作り上げる」側面を持つ議会について報告した。国民党による一党支配型権威主義的統制が強化され、議員任期の無期限延長の中で議員の老齢化が

進むと、立法院は派閥闘争の場から行政院の出す法案を成立させる機関（行政院立法局）になっていた。しかし 69 年には非改選の補充議員、73 年より増加定員選挙で当選した議員の行動と組織戦略を分析すると、議会の変化が見られる。これらの議員はまず頻繁に発言し、万年議員を呼び出す。そして 86 年選挙以後は発言や乱闘だけでなく実際の立法や法改正を求めていく。

一方、70 年代に国民党議員はあまり発言が見られないものの、80 年代はさかんに発言し始め、中には党国体制を批判する国民党議員も出現した。そして立法院長らの仲介役も重要な役割を果たしながら、80 年代後半には乱闘について暗黙の了解も成立し、どれほど乱闘していても最後は与野党が合わせて法改正を行うなど実質的な議論が行われるようになっていったことが示された。

家永真幸（東京医科歯科大学）は「党外雑誌が存在しえた社会的文脈（1975 - 86 年）」と題して、「党外」の言論空間の中でも選挙と異なり、台湾語・台湾人の身体性を伴わない政論雑誌が盛り上がった文脈について、流通・消費の側面も加えながら報告した。国民党中央常務委員会の記録からは、「党外雑誌」の取り締まりは同委員会が国内問題としてトップで処理するのではなく警備総部が日常業務として書店や発行者に発禁処分を出すことで対応していた。ただし、外交部の公開文書の中には北米の台湾独立運動への警戒の文脈で、「党外雑誌」に着目しており、「党外雑誌」は統戦工作の一環として当局が認識していた可能性がある。

「党外雑誌」の流通量は 5 万部から最多の美麗島で 10 万部ほどであったが、読者（多くは都市の中産階級）にとっては雑誌や禁書を買う消費行為が「党外」を支えるものとして認識され、発禁処分を受けてもそれがかえって「面白い雑誌」として保証されるという認識が読者に存在した。また、当時出版物の流通体制が整備されたことも「党外雑誌」の存在を支えた。このように、「党外雑誌」は台湾の民主化との因果関係を論じる難しさはあるが、特殊な環境下で発生した再現不可能な現象であることを指摘した。

田上智宜（大阪大学）は「民主化運動期における自由主義知識人と台湾主体性言説」と題して、オポジションの中心にはいないが政府を批判する自由主義知識人に焦点を当てて報告した。「党外」が 80 年代に台頭するとき、中国出身の自由主義知識人はどのように「党外」に対峙したのかを『中国論壇』を中心に検討した。彼らの中心的メディアであった『中国論壇』は一般人民には理解されにくい学術的な内容であり、一般社会への影響力は低かったが、知識人の集まりとして機能してい

た。同誌では 70 年代以来の「党外」の動きには同情的な論調はなく、台湾主体性言説に関する言論は 80 年代初期に批判的な形で出現する。

しかし、80 年代中期の康寧祥批判の時期になると台湾主体性言説が登場する。1987 年の戒嚴令解除前後は台湾主体性言説について本格的な議論が行われた。中でも戦後生まれの若い世代が『中国論壇』に入っていくと世代間の認識差も浮上するが、学術性を備えた台湾主体性言説は受け入れられた。しかし、最終的にアイデンティティ問題が先鋭化すると『中国論壇』に集まる知識人、特に古い世代の知識人は受け入れられずに学術分析に戻ったことを指摘した。

休憩をはさんで、松田康博（東京大学）は「体制維持と民主化をめぐる中国国民党内の議論」と題し、中国国民党中央常務委員会（中常会）会議記録を用いて体制維持と民主化をめぐる国民党内の議論について報告した。同記録によると、美麗島事件直前には中常会の雰囲気は通常通りで、事件直後も話題にあがらなかった。その沈黙からは、蔣経国に危機感はあるものの美麗島事件は次々と党外人士が逮捕される日常の法律案件と認識されており、脅威とは考えず情報統制で乗り切る、また美麗島事件の担当は警備総部なのであって党中央はそうしたダーティー・ワークには関わらない、という認識が見られる。

しかし、林義雄事件のインパクト、および、アメリカの圧力で軍事法廷の公開に至り、蔣経国はかなり危機感を強め、中国大陆に対する反共のイメージが汚れることも心配した。そこで新聞局長宋楚瑜が体制内の自己洗脳とも言えるべき世論調査を行うが、そのような情報統制には限界も露呈された。かくして蔣経国は 1980 年選挙で公正公開の選挙を主張し（でも選挙には勝つよう要求する）、選挙後には不正行為が少なくて成功だったと総括して以前横行していた不正行為にも慎重になった。今後は中壢事件あたりから含めて国民党と「党外」の両方から分析を進める必要があるとの課題も報告内で示された。

松本充豊（京都女子大学）は「台湾の権威主義体制と野党」と題して、比較政治制度論から権威主義体制下の野党について議論を整理し、民進党の形成期に権威主義体制期の選挙制度と執政制度が「党外」の発展と民進党の結成をいかに規定したのかを報告した。まず、権威主義体制の政治制度は中選挙区制中心の選挙制度であることから雑居的な「党外」にとって有利に働いた。次に執政制度は大統領制に比べて議会や議会内の政党の存在が重要であり、また立法院は争点明示機能を持

つ「アリーナ議会」なので、目立つパフォーマンスに走る党外議員が出現した。

この状況下で「党外」は雑居的な特徴を帯びたまま結党するが、派閥の存続を可能にしたのは中選挙区制であった。1992年の選挙で当選者数が増えると、M+1理論により派閥はさらに多元化した。次に、民進党の「派閥共治」党内ルールが選挙制度と執政制度にいかん規定されているかをみると、国民党への対抗、同党との差別化、複数の党内派閥の存在、党内対立を選挙に持ち込まないために民主的方式が採用されていることが分かった。また、合議制や党要職が短期間で定期改選されるのは、主要派閥が党内資源を分有し、党の一体性を保つ「派閥共治」ための制度であるといえる。一方で、立法院党団の高い自律性も形成された。

報告の最後に、民進党は政権を握っているときは政府と与党議員との足並みの乱れが生じやすい反面、党の路線転換が比較的容易であり、路線対立も党内で完結しやすい。①民進党の歴史的正当性、②権威主義体制下での発展により培われた経験の蓄積、③分裂抑制的な政党組織という特徴が民進党の政党としての「強さ」をもたらしているという指摘も加えられた。

コメンテーターの薛化元（政治大学）は、若林報告に対し、中国民主党結成運動は反対党の歴史の中でどのように位置づけられるのか、先行研究では中国民主党组党運動では外省人エリートの役割が大きいとされているが、何春木、蘇秋鎮ら台湾人の役割など様々な動きもあったのではないかとコメントを行った。岸川報告については、国民党が本土派の抑圧だけでなく県を越えた国民党政治家の抑圧や、国泰信託など企業グループの抑圧についても見るべきだとコメントした。家永報告については、自分も「党外雑誌」の筆者であったことに触れながら、72年体制の中で「党外雑誌」のおかれた状況を論じる必要性を提起した。

田上報告については、自由主義知識人の定義や範囲に関する疑問を提起し、中国論壇以外の投稿も見る必要性を指摘した。松田報告については、美麗島大審にたいして蔣経国の別の見方を提示する別資料の存在を指摘するとともに、中常会の機能が低下している可能性や海外（AIT など）の影響力も見ることが必要であると指摘した。また、蔣経国が言った「生存」とは何かという疑問も提出した。松本報告については、このような中選挙区において民進党の派閥は通常一人しか支持しないので、多くの資源は得られないのではというコメントがあった。

もう一人のコメンテーター、林泉忠（中央研究院）は、最初に「戦後台湾政治史における『国家

化』とその影響」と題して発言し、蒋介石時代に「国家化」が進んでいたことが台湾の国家意識の形成に重要であったことを指摘した。続いて、報告全体へのコメントに移り、若林科研の研究はオポジションの研究から民進党研究、さらに現在の民進党を理解するのに役立つと位置づけ、オーラル・ヒストリーの収集も評価した。そして科研全体の課題として、保釣運動参加者や夏潮など中国寄りのオポジションについても研究の必要性を提起した。

個別報告へのコメントとしては、田上報告には自由主義知識人の定義、70、80年代の自由主義知識人と「党外」の関係性、台湾独立を主張しないなら党外「穏健派」ということの妥当性などを疑問視し、丁寧な類型化が必要だとコメントした。松田報告については、自分が昔インタビューした李煥によると、蔣経国は美麗島事件について「沈思」していた、蔣経国は色々台湾のために建設してきたのに、なぜ台湾人は不満なのかと考えていたのだという。それについて他の資料から補強する可能性を質問した。岸川報告については、国民党の70年代からの台湾青年登用政策の成功・失敗にふれ、国民党の本土派と「党外」の違いについて質問した。

以上の報告に対して、フロアからは、蔣経国や中常会の沈黙に関する解釈の問題、林義雄へのインタビューをしていないこと、小選挙区になった後も民進党内に派閥があること、予備選挙に注目する必要、国民党の本土派と民進党穏健派との協力があつたこと、蔣経国や国民党の側からの研究の必要性、などが指摘された。

最後に研究代表の若林があいさつし、自分が同時代と思っていたことがあつたという間に歴史になったことに当惑しつつ、これを消化したいという思いで研究プロジェクトを始めたこと、検証可能なファクツがそろってきてほしいに学問的な研究に発展してきたことを回顧した。

当シンポジウムは専門的なテーマであるにもかかわらず多くの参加者があり、関心の高さがうかがえた。研究の途上であり中間報告という位置づけであったが、日本における台湾政治研究の一定の水準が示されたといえる。今後、インタビュー記録の刊行そして完成した研究論文の刊行に期待したい。

（記録者：星純子）

第121回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所、早稲田大学東アジアの政治と思想研究部会

日時：12月1日（金）18:20～20:20

会場：早稲田大学3号館306号室
司会：若林正文（早稲田大学）
報告：林果顯（政治大学）
題目：戦後台湾における日本出版物の輸入政策及び日本との交渉（1945-1972）
参加人数：25名

活動報告：

本報告は、戦後台湾における日本出版物の統制体制を外交面から検討し、中華民国（以下、国府）の日本文化に対する態度および統治能力を明らかにしたものである。林果顯氏は、台湾側と日本側の公文書を使用し、国府・日本両政府間の交渉過程に着目しつつ、台湾における日本出版物の統制体制の成立・変動とその要因を分析した。

それによれば、出版物の統制体制は、次の四つの時代区分に分けられる。すなわち、①戦後体制から戦争体制に戻る時期（1945-1950）、②台北和約に対応する時期（1952-1957）、③段階的管制緩和時期（1957-1962）、④再び管制が厳しくなる時期（1962-1972）である。

分析の結論としては、①管制体制は、両国の関係と国府の当時の統治能力によって異なる、②1950年代末、国府は政府組織を再編する余裕と能力を持っていた、③国府の日本に対する地位は基本的に矛盾がある、④国家の安全は冷戦体制の盟友より大切であると論じた。

（記録者：魏逸瑩）

第122回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所、早稲田大学東アジアの政治と思想研究部会
日時：2017年12月22日（金）18:20～20:20
会場：早稲田大学3号館306号室
司会：若林正文（早稲田大学）
報告：家永真幸（東京医科歯科大学）
題目：シリーズ「著者との対話」
『国宝の政治史―「中国」の故宮とパンダ』
（東京大学出版会、2017年）
コメンテーター：張碧恵（早稲田大学）
参加人数：34名

活動報告：

「著者との対話シリーズ」として『国宝の政治史―「中国」の故宮とパンダ』の著者である家永真幸氏を招いた。まず張碧恵氏が評者として本書に関する報告を行った。張氏は本書の内容をまとめた上で、本書が「文化触変」および「ミュージアムの思想」という概念を貫き、通史的かつ通説的な議論から一線を画して故宮文物とパンダにつ

いて分析して「国宝形成の政治力学」に関する議論を展開したことに学術的意義があると指摘した。さらに「文化触変」の概念において家永氏が「台湾ナショナリズム」を文化システムの外来物と捉えたことに「台湾ナショナリズム」は台湾に内在されたものではないかなどと問題提起した。

以上の張氏の報告に対し、家永氏は「文化触変」が想定している文化システムはそれまでに文化を構成している要素によって形成されているもので、「台湾ナショナリズム」は新たに勃興して、文化を構成する要素となったから外来のものと捉えられると答えた。

これらの報告に対し、会場からは博物館の文物がもつ国民統合の「神聖性」に関する議論やナショナリズムとの関わり、「国宝」として結び付けられたパンダと故宮の差異についての数多くの質問とそれらの討論が行われた。

（記録者：劉彦甫）

第123回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所、早稲田大学東アジアの政治と思想研究部会
日時：2018年1月26日（金）18:20～20:20
会場：早稲田大学3号館306号室
司会：梅森直之（早稲田大学）
報告：若林正文（早稲田大学）
題目：「台湾という履歴」への視角
参加人数：57名

活動報告：

報告の冒頭で若林氏は「台湾という履歴」というタイトルとそれに対する「視角」の意味を説明した。「台湾という履歴」という題は単に台湾の歴史としての「履歴」ではなく、「履歴」の成り立ちを含めた全体像への解釈を要求しているとして、それに応えるためには大きな歴史的ダイナミズムを浮き彫りにするための視角とそのダイナミズムの論述をしっかりと行うための輪郭を与える視点が必要ではないかと指摘した。これらの視角への手がかりとして、台湾史学者の概念図と台湾先住民（原住民）の経験の二つが手がかりになると言及した。

報告では台湾歴史研究において展開されている諸概念や台湾史のアクターとしての台湾先住民の経験、「帝国」という視点などについて提示し、具体的な歴史的対象とそれらの概念的解釈への言及を合わせて「台湾という履歴」への視角についての考えを提示した。

この報告に対して司会の梅森直之氏は「台湾という履歴」なる問いが将来の台湾を意識して問わ

れている点と、「台湾史の履歴」と「台湾研究の履歴」という二つの履歴を含意している「履歴」を語るのは誰かという点からコメントが行われた。

これらの報告に対し、会場からは「帝国」の統治実践と台湾の経験や「履歴書」を書く人の視点はどこからもたらされるのかなどいくつかの質問が出され、それらに対する討論が行われた。

(記録者：劉彦甫)

定例研究会 関西西部会研究大会

担当理事：澤井律之（京都光華女子大学）

第15回日本台湾学会関西西部会研究大会が昨年、12月16日に京都光華女子大学で開催された。

研究発表は以下のとおり。

①HOFER Fabienne ホーファー・ファビエン（大阪大学大学院）

「日本訳語「国民」と「民族」の原語、日本と台湾における普及」

評論：杉本良男（国立民族学博物館名誉教授）

②謝政徳（大阪大学招聘研究員）

「近代台湾の法律専門職の形成—1900年「台湾弁護士規則」の制定を中心に」

評論：やまだあつし（名古屋市立大学）

③Jenine Heaton ジェニン・ヒートン（関西大学）

「異文化間の風景：石川欽一郎と台湾近代美術團—倪蔣懷、陳植棋と陳澄波を巡って」

評論：立花義彰（西藏寺住職）

④宮崎聖子 福岡女子大学

「植民地台湾の内地人女性と帝国の「知」

評論：岡田浩樹（神戸大学）

⑤平井清子（北里大学）

「戦後台湾の英語教科書への政治的影響の考察—「課程標準」準拠（1971年）高等学校英語教科書の題材内容の研究から」

評論：山崎直也（帝京大学）

⑥田上智宜（大阪大学）

「民主化期における市民権制度の台湾化」

評論：今井淳雄（天理大学）

⑦劉梅玲（龍谷大学非常勤講師）

「東南アジアの華人社会における客家の位置づけ」

評論：宮原暁（大阪大学）

⑧小池浩一郎（島根大学）

「台湾における再生可能エネルギー利用の制度的確立と東南アジアへの展開可能性」

評論：北波道子（関西大学）

①HOFER Fabienne 氏は、「nation」の訳語である「国民」と「民族」について、19世紀後半から20世紀前半に出版された辞書の使用例をもとに、日本と台湾でどのように定着していったのかを追跡し、台湾知識人のアイデンティティの有様を考察した。十分な結論を提出するまでには至っていないが、切り口は斬新であり、今後が大いに期待されるものであった。

②謝政徳氏は、台湾において近代法がいかに継受されたかを弁護士制度や訴訟例をもとに実証的に論じた。とくに第4代台湾総督児玉源太郎、民政長官後藤新平体制以前の領台初期の事情に着目した点が高く評価された。

③Jenine Heaton 氏は、台湾で近代美術の発展に貢献した石川欽一郎とその弟子たちを紹介した。本学会においてこの分野の研究者は少ない。幸いにも石川欽一郎研究の第一人者である立花義彰氏お出でいただき、コメントをいただくことができた。発表とともに大いなる知見を共有することができた。

④宮崎聖子氏は、1930年代に台湾で言論活動を行った女性、田中きわのの半生を明らかにし、彼女の言論について検討した。台湾に在住した日本女性についての研究が少ないなか、注目に値する。氏は彼女を「非常に保守的」と否定的に位置づけるが、そこに収斂しない部分があることをも指摘している。更なる研究の深化が望まれる。

⑤平井清子氏は、台湾の高等学校で用いられた英語の教科書を調査し、台湾の英語教育について考察した。台湾では1968年に9年義務教育が始まった。氏は、その直近の1971年に発布された学習指導要領に準拠する高等学校の英語教科書に着目し、中華の民族文化や国民党の政治思想が題材に取り入れられていることを指摘した。今後、戦後台湾の英語教育論へと発展していくことだろう。

⑥田上智宜氏は、目下30数万人にも達するといわれる中国大陸籍配偶者移民を台湾当局がどのようにして受け入れたかを論じた。またそのことによって中華民国の市民権が「台湾化（中華民国が台湾のみを統治しているほうへ向かう変化）」している現在の状況を明らかにした。

⑦劉梅玲氏は、台湾の「四大族群」の1つである「客家」を相対化するために、今回は東南アジアのシンガポールとマレーシアの客家を紹介した。東南アジアには多くの華人が住み、華人社会を形成しているが、華人社会における秘密結社や会館

等に着目し客家の特色を剔出した。今後は、研究の範囲をさらに拡大することを課題とした。

⑧小池浩一郎氏は、台湾の環境とエネルギー問題について提言を行った。脱原発に取り組む台湾では、再生可能エネルギー発電を発展させるべきであり、中でも、森林資源が豊富な台湾では、木質ペレットによるバイオマス発電を導入すべきだ、それがまた台湾の山地、山地民の潜在力を活かすのだと言う。

全体に非常にバラエティに富んだ研究発表であった。コメンテータもそれぞれの研究のオリジナリティを指摘するとともに有用なアドバイスをを行った。関西部会ではあるが、関東方面からもお出でいただいた。この場をかりてお礼申しあげたい。

参加人数は35名。学会終了後、西京極駅前の創作居酒屋「ぼっさ」で懇親を深めた。

定例研究会

台北

担当理事：富田哲（台湾・淡江大学）

第79回台北定例研究会

日時：2018年3月3日（土）16:00

場所：台湾大学台湾文学研究所

報告者：根岸忠（高知県立大学文化学部）

テーマ：台湾における外国人労働者政策

—居宅介護労働者の労働条件保護のあり方をめぐる議論に焦点をあてて

使用言語 日本語

第80回台北定例研究会

日時：2018年3月24日（土）15:00

場所：台湾大学台湾文学研究所

報告者：赤松美和子（大妻女子大学比較文化学部）

テーマ：90年代を描く台湾映画で懐古されるジェンダー保守日本

使用言語：日本語

学会運営関連報告

担当理事：星名宏修（一橋大学）

第10期理事会

第1回常任理事会 議事録

日時：2017年7月15日（土）13:00-16:40

場所：関西大学東京センター

出席：上水流久彦、川上桃子、洪郁如、佐藤幸人、星名宏修、山崎直也（以上常任理事）、赤羽淳（大会実行委員長）、家永真幸（書記担当幹事）

Skype出席：北波道子、富田哲、松田康博

欠席：大東和重、三澤真美恵

議長：佐藤幸人

書記：家永真幸

13時に議長席に佐藤幸人常任理事がつき開会を宣言し、冒頭にて欠席の三澤理事長からのメッセージを読み上げた。その上で、今後の三澤理事長の欠席期間中については、理事長業務を松田副理事長、常任理事会運営は星名総務担当理事、大会関係は佐藤常任理事が分担して責任をもつことが提案され、満場異議なく承認された。

続いて、本日は議題が多いことから報告事項は省略し、すぐに審議事項に入ることが提案され、満場異議なく承認された。

報告

1. 理事長・事務局

（1）松田副理事長（Skype）

佐藤前理事長より、旧交流協会の正式名称が「日本台湾交流協会」となり、新たな理事長として谷崎泰明氏が就任したことがアナウンスされた。

以下、報告事項は、口頭での報告が省略された。書面で報告された内容のうち、審議事項内に重複の無い内容のみ、以下議事録として残す。

（2）星名総務担当理事

省略。

2. 各業務担当

（1）星名総務担当理事

省略。

（2）北波会計財務担当理事

省略。

（3）上水流編集委員長

省略。

(4) 川上企画委員長
省略。

(5) 山崎広報担当理事

山崎理事より、①ウェブ関連、②ニュースレター関連、③名簿改訂、の各点につき報告された。

ウェブ関連については以下のとおり。ウェブサイト、ブログ、メール情報配信サービス(JATS Mail News)は通常通り。JATS Mail News は、第 19 回学術大会後、3号を発行(通巻 90 号)。JATS Mail News の登録アドレスは全 466 件。会員 435 名(458 件)、賛助会員 7 件、事務局 1 件。(2017 年 7 月 14 日現在)

また、ブログ管理、ウェブサイト管理、JATS Mail News 配信、JATS Mail News 登録名簿管理の各業務を 1 年間で段階的に山崎から今井幹事に引き継ぐ予定。

ニュースレター関連は、大東理事からの報告に基づき、ニュースレター第 33 号の特集につき、2017 年の学術大会を総括する特集「学術大会を振り返って」を含む第 33 号を現在編集中(10 月発行予定)であることが報告された。

名簿改訂については、会員名簿改訂のため、ウェブフォームと書面郵送の二段構えで更新情報を収集している旨報告された。ウェブフォームによる届け出は、7 月 14 日現在で 55 件。受付終了は 7 月 20 日(木)。

(6) 松田国際交流担当理事
省略。

(7) 洪文献目録担当理事

「戦後日本における台湾関係文献目録」について、2017 年 3 月現在、14,524 件のデータが登録されている(最終更新:2017 年 1 月 24 日)。4-6 月分は新たに 288 件が追加されたが、日本台湾交流協会の目録担当者より、ソフト使用の許可が下りずしばらく更新作業ができない旨連絡があった。

(8) 北波関西西部会担当理事(Skype)
省略。

3. その他
省略。

議題

1. 第 19 回学術大会について(駒込)

駒込第 19 回大会実行委員長より、配布資料に基づき、大会運営の総括がなされた。開催校の実行

委員に集中する業務負担、参加費、配布物、託児ほか諸点につき、上手くいった部分や、継続審議の必要な問題が指摘された。

併せて、松田プレ企画責任者より、プレ企画の総括が行われた。

川上企画委員長より、記念講演に関し、会員から寄せられた意見が紹介され、今後の方針について審議に付された。継続審議となった。

2. 第 19 回学術大会決算報告(駒込)

駒込第 19 回大会実行委員長より、配布資料に基づき、大会決算報告が行われた。

3. 第 20 回学術大会分科会企画・自由論題報告の募集要項

川上理事より、配布資料に基づき、第 20 回学術大会分科会企画・自由論題報告の募集要項案が示され、審議に付された。満場異議なく承認された。今後、締め切りをどのようなタイミングに設定するのかについては、常任理事会の承認を不要とする改革をするか否かを含め、継続審議となった。

4. 『日本台湾学会報』第 20 号の投稿および原稿執筆要領等について(上水流)

上水流理事より、配布資料に基づき、第 20 号の投稿執筆要領、書評依頼、査読判定用紙の変更につき提案された。審議の結果、異議なく承認された。

学会報に掲載する予定の、これまでの例会の記録は、ニュースレター掲載の日時、発表者、表題程度とすることが確認された。

5. 第 20 回大会について(赤羽・佐藤)

赤羽大会実行委員長より、配布資料に基づき、大会の準備状況につき報告された。今後後の動きなどにつき情報交換がなされた。

6. 世界台湾研究大会関連について(松田)

松田理事より、第 20 回大会の企画として実施する予定の「回顧と展望」を、世界台湾研究大会に対しても、日本台湾学会によるパネルとして参加する提案がなされ、満場異議なく承認された。その上で、具体的な準備は洪郁如理事と川上桃子理事が責任者として取り仕切ることが決議承認された。

併せて、松田理事より、有職者でない会員が報告者に決定した場合は、翻訳のアルバイト代を学会から補助することが提案され、満場異議なく承認された。

7. オープンアクセスに関する学会員意向調査について（上水流）

上水流理事より、配布資料に基づき、オープンアクセスに関する学会員意向調査の草案が示された。審議の結果、今回の修正意見を反映した案をメール稟議に付した後、実施に移すことが決議承認された。

8. 会員の入退会（星名）

星名理事より、以下の4名の入会希望申請が報告され、審議の結果入会が承認された。また、下記1名の退会が報告された。（いずれも敬称略。）

入会4名：楊名豪（京都大学大学院）／邱昱翔（大阪市立大学）／安里陽子（同志社大学）／鈴木洋平（埼玉県立歴史と民俗の博物館）

退会1名：黄天横

9. 会員名簿の改訂作業（山崎）

報告事項として報告済み。

10. 多年度会費未納者の退会および再入会時について

駒込前大会実行委員長より、長期会費未納者から未納分9年分の会費納入の申し出があったことが報告され、対応が審議に付された。この申し出については受け入れた上で、今後の長期会費未納問題に対するルール整備については継続審議となった。

11. 次回の常任理事会の日程について

次回常任理事会は、12月10日（日）13時より、東京大学東洋文化研究所（本郷キャンパス）にて開催されること、会場は松田理事が予約することが決定した。

12. 名誉理事長について

佐藤理事より、名誉理事長に対してどのような形で顕彰すべきか意見聴取があった。審議の結果、当面はHP上で永久に顕彰することが決議された。

13. その他

①「回顧と展望」人選について

洪理事より、第20回大会のシンポジウムで「回顧と展望」を行う人選について、常任理事会での承認が必要か確認され、不要であることが承認された。

②HP作成ソフト購入について

山崎理事より、ウェブサイト管理を今井会員に引き継いでもらうにあたり、管理ソフト「ホーム

ページビルダー」の購入許可が求められた。満場異議なく承認された。

③事務局の扇風機購入について

佐藤理事より、事務局の作業環境が劣悪であることから、扇風機の購入許可が求められた。異議なく承認された。

④会費納入の督促について

佐藤理事より、学会報および名簿の送付が9月に行われる際に、会費の督促はどうすべきか、審議に付され、事務局から未納者には手紙を同封することになった。

⑤第21回大会開催校について

松田理事より、第21回大会開催校について報告と意見聴取があった。佐藤理事からの依頼を軸に、継続審議となった。

16時40分、佐藤理事が閉会を宣言し審議を終了した。

以上

第10期理事会 第2回常任理事会 議事録

日時：2017年12月10日（日）13:05-18:05

場所：東京大学東洋文化研究所3階第一会議室

出席：上水流久彦、川上桃子、北波道子、洪郁如、佐藤幸人、星名宏修、松田康博、山崎直也（以上常任理事）、赤羽淳、垂水千恵、五十嵐隆幸（第20回学術大会実行委員会）

スカイプ出席：大東和重、冨田哲、三澤真美恵

議長：松田康博

書記：家永真幸

報告

1. 理事長・事務局

（1）松田副理事長

順調に運営されている旨報告された。

（2）星名総務担当理事

特になし。

2. 各業務担当

（1）星名総務担当理事

特になし。

(2) 北波会計財務担当理事

北波理事より、最近の収入・支出の概要につき報告された。

(3) 上水流編集委員長

配布資料に基づき、投稿原稿の査読状況、書評の依頼状況等について報告された。2017 年度会報が 10 月発行と例年より遅くなった事情について説明された。

(4) 川上企画委員長

審議事項参照。

(5) 山崎広報担当理事

配布資料に基づき、ウェブサイト、ブログ、メール情報配信サービス(JATS Mail News)はいずれも通常通り運営されていること、JATS Mail News は、前回理事会後、2017 年 12 月 15 日までに 15 号を発行(通巻 105 号)したことが報告された。あわせて、今井幹事との分業が順調に進んでいること、前回の常任理事会で承認されたホームページビルダーはすでに購入したこと等が報告された。また、2017 年 11 月 21 日に許極敏著『台湾話詞語典』(台南:台南市政府文化局、2017 年)の無料配布希望者を募り、10 冊の配布先が即日で確定したことが報告された。

大東理事より、ニュースレターは 33 号を 10 月に無事発行し、34 号は原稿を依頼済みである旨報告された。

(6) 洪文献目録担当理事

配布資料に基づき、交流協会のシステム移行中であるため、1 月より更新が依然として停止している旨報告された。鶴園会員の作成したデータベースは 16,032 件だが、表示上は 14,524 件のままである。

(7) 松田国際交流担当理事

WCTS については、審議事項参照。

JSTS(地域研究コンソーシアム)とのやり取りについては、今後は常任理事まで適宜メールを転送・回覧する方針である旨報告された。

(8) 北波関西西部会担当理事

北波理事より、12 月 16 日(土)に京都光華女子大学にて研究大会を開催する旨報告された。

(9) 台北部会

富田理事より、台北部会については特に報告事項がない旨報告された。

3. その他

特になし。

議題

1. 台湾文学学会との提携について(星名)

台湾で設立された台湾文学学会より、台湾学会との提携の申し入れがあった旨報告された。是非について審議した結果、星名理事が先方への返答案を作成することに決定した。その際、公平性を保つためにも、未納問題がクリアされることを、交渉のテーブルにつく条件として申し入れることが決議された。

2. 第 20 回学術大会について

(1) 会場校の準備状況について(赤羽)

配布資料に基づき、赤羽実行委員長より、準備状況につき報告された。企画委員会の役割分担、託児補助等について意見交換がなされ、それらを反映させたうえで、原案どおり進めることが承認された。

(2) 大会予算案について(赤羽)

配布資料に基づき、第 1 日目の予算案について赤羽委員長から、2 日目の予算案につき垂水委員から説明された。託児補助について 2 (1) で確認された新たな方針を反映させた上で、予算案を承認することが決議された。

(3) 分科会企画・自由論題報告について(川上)

川上理事より、配布資料に基づき、第 20 回大会の企画応募の採否案につき報告され、審議に付された。細部についての各常任理事からの意見を反映し、原案どおり準備を進めることが承認された。

3. 学会報のオープンアクセスについて(上水流)

上水流理事より、配布資料に基づき、学会報のオープンアクセスに関する会員アンケート結果が報告され、「1 年経過後にオープンとする」を常任理事会決議案とすることが提案された。審議の結果、原案どおり承認された。あわせて、アンケート結果については総会でも言及する方針が確認された。

4. 学会報 20 号等の企画について(上水流)

上水流理事より、学会報第 20 号につき、記念号なのでアルバイトを雇用して総目次を作りたいので、予算を承認してほしい旨提案された。審議の結果、継続審議となった。また、同号に企画特集についても意見交換がなされた。

5. 会員の入退会について（星名）

回覧資料に基づき、下記2名の入会につき審議に付され、満場異議なく承認された。あわせて、下記3名の退会が報告された（敬称略）。

入会：下野寿子、藤川美代子

退会：服部健治、丸川哲史、林冠汝

6. 多年度会費未納者の退会および再入会時について（星名）

回覧資料に基づき、会費未納者について7年分まで記録を残しているが、これを4年の自動退会で切って名簿を整理すべきかどうか審議に付された。審議の結果、審議を継続することとなった。

7. 賛助会員との連絡について（佐藤）

佐藤理事より、賛助会員との定期的な連絡を維持する方法について問題提起がなされた。審議の結果、案件ごとに個別に対応する方針が確認された。

8. 次回の常任理事会の日程について（星名）

次回常任理事会は、3月11日（日）13時より、東洋文化研究所3階第一会議室にて開催することが決定した。

9. その他

洪理事より、配布資料に基づき、WCTSの日本台湾学会パネル案が示され、満場異議なく承認された。あわせて、もう1名。英語発表のパネルに報告者を出さなくてはならなかったことが報告され、審議の結果、松田理事が登壇することに決定した。

このほか、次回大会の日程・会場案について意見交換がなされた。

以上

第10期理事会 第3回常任理事会 議事録

日時：2018年3月11日（日）13:00 - 19:00

場所：東京大学東洋文化研究所3階第一会議室

出席：上水流久彦、川上桃子、北波道子、佐藤幸人、星名宏修、松田康博、三澤真美恵、山崎直也（以上常任理事）、赤羽淳（第20回学術大会実行委員長）

スカイプ出席：富田哲

オブザーバー：石塚香（赤羽淳・秘書）、呂宜雅（横浜市立大学博士後期課程）

欠席：大東和重、洪郁如

議長：三澤真美恵

書記：家永真幸

報告

1. 理事長・事務局

（1）松田副理事長（理事長代理業務報告）
台湾協会に挨拶に行った旨報告された。学会報刊行支援への御礼等。

（2）星名総務担当理事
特になし。

2. 各業務担当

（1）星名総務担当理事
特になし。

（2）北波会計財務担当理事
大会後の会費振込状況が芳しくない旨報告された。

（3）上水流編集委員長
配布資料に基づき、学会報第20号の編集は順調に進んでいる。

（4）川上企画委員長
特になし。

（5）山崎広報担当理事
ウェブサイト、ブログ、メール情報配信サービス（JATS Mail News）は通常どおり運営されている。
ニュースレター34号は発行月2018年4月、配信同3月末の予定で進めている。

（6）洪文献目録担当理事（星名理事代読）
欠席の洪理事が事前に提出した報告資料に基づき、交流協会の新システムは3月末日のリリースを目指して作業中である旨、鶴園会員の作成したデータベースは16,194冊（～2017年12月まで）だが、表示上は14,524件のままである旨報告された。

（7）松田国際交流担当理事

今年9月に台北で開かれるWCTSの、英語によるRoundtable Sessionには、松田理事が日本台湾学会を代表して登壇する旨報告された。また、先日の花蓮の地震に際しては、前回の台南での地震の

際の対応を踏襲し、お見舞いのメッセージの発信および寄付を行ったことが報告された。

(8) 北波関西部会担当理事

前回の常任理事会後、無事に開催された。今年度の日程等は未定。

(9) 台北部会(富田理事)

第 79 回定例会は根岸忠氏を報告者として 3 月 3 日に開催された。第 80 回は赤松美和子会員の報告で、3 月 24 日に開催予定。

3. その他

各理事よりいくつかの報告があった。

議題

1. 第 20 回学術大会について

(1) 分科会企画・自由論題報告について(川上)

配布資料に基づき、プログラム案が示された。審議の結果、報告タイトルの表記法については報告者に再度確認の上、原案どおり進めることが承認された。20 周年記念シンポジウムについては、2 月半ばに登壇者による打ち合わせを行ったことが報告された。

(2) 会場校の準備状況について(赤羽)

配布資料に基づき、大会運営の細部につき意見交換がなされた。

(3) 2 日目の企画について(佐藤)

企画責任者の鈴木賢会員に代わり、佐藤理事より準備状況が報告され、細部について意見交換がなされた。

(4) 大会予算案について(赤羽)

配布資料に基づき予算案が示された。審議の結果、大会 2 日目のシンポジウムには通訳費用 10 万円、機材費用 16 万円と修正することが決議承認された。

2. 会員の入退会について(星名)

回覧資料に基づき、下記 1 名の入会につき審議に付され、満場異議なく承認された。あわせて、3 名の退会が報告された(敬称略)。

入会：伊藤幹彦

退会：中島利郎、伊東和久、ほか 1 名

3. 台湾文学会との提携について(星名)

配布資料に基づき、台湾文学会との提携の際に取り交わす協定書の文言について審議に付された。

各理事から提起された意見を星名理事が取りまとめ、規約改正案を 5 月の理事会に諮ることが決議承認された。

4. 常任理事会連絡用掲示板について(山崎)

常任理事会での個別トピックでの議論の経緯を確認しやすくするための方法につき、意見交換がなされた。審議の結果、山崎理事が Google グループを立ち上げ、当座の議題について実験的に使用してみることが決定された。

5. 次回の常任理事会の日程について(星名)

6 月 30 日、7 月 1 日、7 月 8 日のうち、新旧大会実行委員長の都合がつく日に開催する。

6. その他

①今後台湾で地震などの災害が発生した場合、常任理事会からの寄付金等の取りまとめは副理事長が行う方針が確認された旨、本議事録に記録に残すことが決議承認された。

②上水流理事より、編集委員会関連の継続審議事項 2 件について審議に付された。学会誌に「彙報」を新設する案については、編集委員会の負担増を心配する声が優勢であったことから、今回は実施を見送ることに決定された。「台湾研究の歴史をふりかえる」企画については、計画どおりすすめることが承認された。

③かつて賛助会員だった方々への連絡方法について意見交換がなされた。

④佐藤理事より、名誉理事長の HP 上での紹介方法について 2 案が示され、2 案とも採用することが承認された。

⑤次期学会賞選考委員長の選出について、意見交換がなされた。

⑥第 21 回大会は宮岡会員を実行委員長として福岡大学で行うことが承認された。

以上

***** 編集後記 *****

・本号は特集「銀幕の台湾」としてお届けいたします。映画を通して台湾を知ったという方も多くいらっしゃると思います。編集子にとっても、初めて台湾へ行く前に見た、侯孝賢監督の『恋恋風塵』や『悲情城市』は忘れがたく、台湾という土地とそこに住む人々について教えてくれました。会員の皆様にも忘れがたい一作がおありではと思います。本号の特集が皆様と記憶を共有するものとなっていることを願いつつ編集いたしました。

・ニュースレターは会員による情報交換の場でもあります。台湾と関わるシンポジウム・研究会・展示等の参加記や、学術交流の動向など、積極的なご投稿をお願い申し上げます。

(大東和重)

日本台湾学会ニュースレター 第34号

発行：日本台湾学会（代表 三澤真美恵）
発行年月：2018年4月

■日本台湾学会事務局

〒261-8545 千葉県千葉市美浜区若葉3-2-2
アジア経済研究所 佐藤幸人研究室気付
E-mail: nihontaiwangakkai@gmail.com

■ニュースレター発行事務局

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155
関西学院大学法学部 大東和重研究室気付
E-mail: kaohigashi@kwansei.ac.jp